

I 平城宮の調査

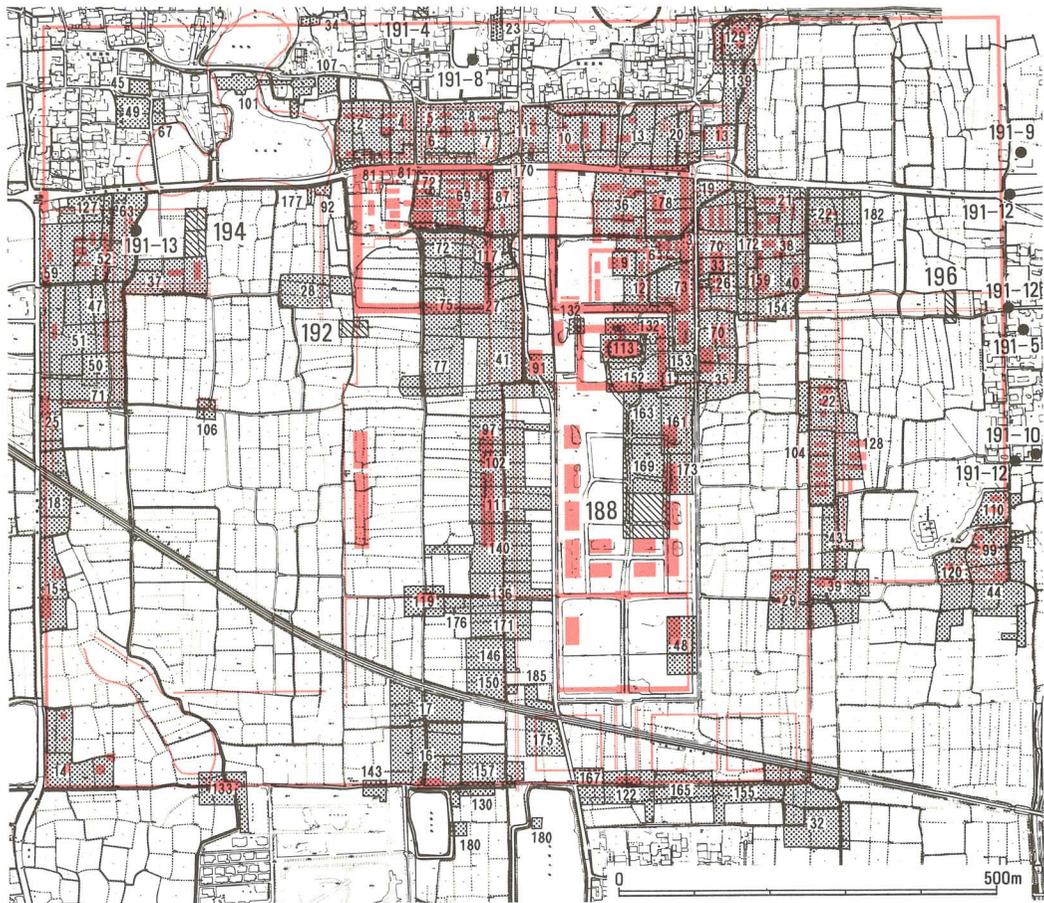


図1 昭和63年度平城宮跡発掘調査位置図（1：10000）

表1 昭和63年度 平城宮跡発掘調査地一覧

調査次数	調査地区	面積(㎡)	調査期間	発掘担当者	備考	掲載頁
188	第二次朝堂院朝庭域	3,080	4. 1～ 7. 20	本中 真		3
192	第一次大極殿地区西南部	1,014	7. 4～ 10. 3	小野 健吉		11
194	馬寮東方地区	1,800	10. 1～ 10. 27	浅川 滋男		18
196	東院地区	500	3. 1～ 3. 28	島田 敏男		29
191- 2	平城宮北方遺跡	20	4. 8～ 4. 12	小林 謙一	城田依則宅	42
191- 4	平城宮北面中門推定地	400	5. 24～ 7. 7	綾村 宏	岡田・大西宅	33
191- 5	平城宮東面大垣	90	6. 7～ 6. 23	小林 謙一	西田奈良造宅	35
191- 8	平城宮東面大垣	25	11. 17～ 11. 18	村上 隆	福山 明宅	122
191- 9	平城宮内北方遺跡	9	11. 28～ 11. 30	村上 隆	西本良作宅	122
191-12	平城宮東面大垣	40	2. 4～ 2. 8	島田 敏男	下水道工事	35
191-13	馬寮東方地区	6	3. 9～ 3. 10	玉田 芳英	整備工事	18

1 第二次朝堂院朝庭域の調査 第188次

1 はじめに

当調査部では、1984年度の第163次調査以来、第二次朝堂院における発掘調査を継続的に行なって来た。その一環として、本年度は東第三堂西側の朝庭域における調査を実施した。本調査区は第169次調査区の南に接し、南北56m、東西55m、面積3,080㎡で、調査期間は1988年4月1日から7月20日までである。なお、1988年4月23日から「奈良シルクロード国際博覧会」が平城宮跡を第2会場として開催されたが、本調査は来訪者に対する見学コースの一環として設定した。

2 遺構層序

調査地の基本層位は、大正11年（1922）に奈良県が行なった第二次朝堂院地域の整備に伴う盛土が約15～20cmあり、その下層に順次耕作土（厚さ15cm）、床土（厚さ10cm）が存在し、現地表下約40～60cmで奈良時代の遺構面となる。奈良時代の遺構面は調査区の北¼が黄褐色砂質土の地山で、南¼が、暗黄褐色土の整地土である。調査区東南隅における奈良時代の盛土の厚さは約10cmである。奈良時代の遺構面の下層には、調査区南端付近に厚さ約10cm程度の奈良時代以前の整地層が存在する。本調査区は、平城宮の北方からのびる舌状丘陵地形の先端部にあたり、平城宮の造営以前から丘陵頂部を削り、東南の谷筋に向って盛土整地を行なったのであろう。

3 遺 構

検出した遺構は、古墳が6基、古墳時代以降で奈良時代以前の周濠遺構1、奈良時代の掘立柱建物2棟および性格不明の遺構1、そして平安時代の掘立柱建物13棟、井戸1基、土坑3基などである。以下に時期別に遺構の概略を解説する。

古墳時代

SX13323、13328、13329、13331、13334、連続する溝状遺構SX13324～13325、13326～13327、13332～13333が存在する。いずれも幅約1～1.5mの溝で、隅丸形状の平面プランをもつ方墳の周濠と考えられる。墳丘は完全に削平されてい

る。周濠の深さは約20cmと浅く、断続的にしか遺存しない。

古墳時代～平城宮造営まで

SX13335 SD13317～13319で北・西・東の三方をとりかこまれた方形の遺構。3本の溝は幅約1～2m、深さ約30cmで互いに連続し、SX13335の周濠をなす。先述のように、地山の上面に厚さ約10cmの黄褐色土で整地を行ない、この上面から溝を掘削する。SX13335はもともと台状に盛り上げられていたものと思

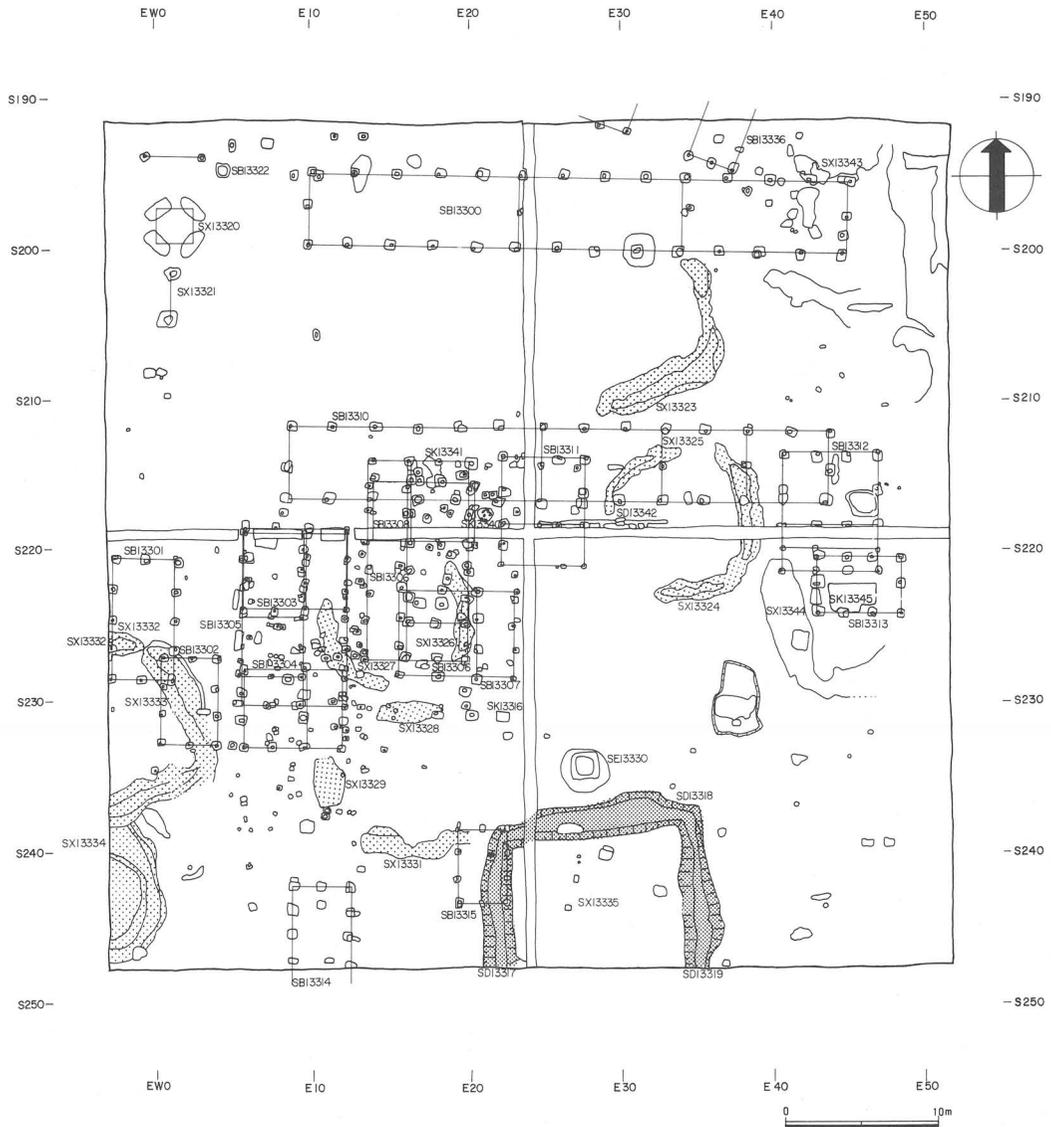


図2 第188次調査遺構配置図(1:500)

われるが、上面は削平されて残らない。東側の南北溝SD13319の埋土からは、四重弧文の軒平瓦1点を含む白鳳時代の瓦片が多量に出土した。瓦片は平瓦が大 halfで丸瓦は1点のみである。SX13335の性格については不明だが、軒瓦を含む瓦片が多量に出土したことから、おそらく平城宮造営以前の寺院の伽藍に関連する遺構と考えられ、廃絶とともに瓦が一括投棄されたものと思われる。

奈良時代の遺構

SB13300 調査区北辺で検出した東西13間、南北2間の掘立柱建物東西棟。桁行総長35m、梁間総長5mで、柱間寸法は桁行がほぼ9尺等間、梁間が8.3～8.5尺である。西から5間目と9間目に間仕切がある。SB13300の側柱通は国土方眼座標第VI系に対して東で南に約 $1^{\circ} 1' 0''$ 偏っている。また、東西に13間と長大な建物ではあるが、柱掘形が約60～70cm四方の隅丸方形で、柱抜取穴の径も20～30cmと小さい。従って恒久的な建物というよりは、朝庭域に建設された仮設的な建物である可能性が高い。なお、柱掘形、柱抜取穴からの出土遺物はない。

SB13310 調査区中央に存在する東西13間、南北2間の掘立柱建物東西棟。桁行総長35m、梁間総長4.9～5.0mで、柱間寸法は桁行がほぼ9尺等間、梁間が8.3～8.5尺である。SB13300と同規模だが、西から6間目、9間目、11間目に間仕切の柱が存在し、内部の構造が異っている。また、柱掘形、柱抜取穴の規模もSB13300と同程度であるが、SB13310の柱抜取穴からは、軒瓦片を含む瓦片が多量に出土した。軒瓦は平城宮出土軒瓦編年第Ⅲ期に属するものが多い。

SD13342 SB13310南側柱通の南約1.5mの位置に存在する東西方向の素掘り溝。幅約30cm、深さ約5cmで、延長9.5mを検出した。SB13310南側雨落ち溝に相当する。

SX13320 調査区北西隅で検出した4つの大形掘形。1つの掘形は、長径約2m、短径約0.8mの長円形で、深さは約1.4mである。4つの掘形は、それぞれ国土方眼方位の北に対して約 45° 傾いており、東北と西南、西北と東南に心々間約3mの間隔で相対して位置する。2ヶ所の掘形断面を観察したところ、掘形の壁面はほぼ垂直で、底部は平坦である。埋土は小礫を含む砂質土が不整合に入り交り、

柱を建てたような明確な痕跡はない。また埋土からの出土遺物もない。これらの4つの掘形で囲まれた中心点は、第二次大極殿・朝堂院の南北中軸線上に位置し、第二次朝堂院の南北長を960小尺（約285m）に想定した場合、これを南北に2分する位置に存在する。すなわち、SX13320は第2次朝堂院のほぼ中心に位置しているのである。従ってSX13320は、朝堂院の建設に際して重要な役割を持つ何らかの建造物の基礎か、あるいは地鎮のような埋納遺構である可能性がある。

SX13321 SX13320の南に南北にならぶ2つの大形掘形。北側の掘形は直径約0.9～1.2mの不整形で深さは約70cmである。南側の掘形は一辺約1.2mの不整形隅丸方形で、深さは約95cmである。この2つの掘形の断面は、いずれもすり鉢状を呈し、柱抜取痕跡がある。両者の柱抜取穴心々間距離は約3m（10尺）である。おそらくSX13320と一体の遺構であろう。

SB13322 SX13320の北約3mに位置する東西方向にならぶ1対の柱掘形。掘形の一辺は約40～50cmと小さい。おそらく2本の柱による門の遺構であろう。両柱抜取穴心々間距離は約3.3m（11尺）である。SB13322は、SX13320、13321と一連のものである可能性もある。

SK13341 調査区中央で検出した約2m×約1.5m、深さ約10mの不整形な土坑。埋土には焼土が混じっており、奈良時代末期の土器が出土した。なおSB13306と13308の柱掘形がSK13341と重複しており、SK13341の方が古い。

平安時代の遺構

平安時代に属する建物は表2のとおりである。いずれも柱掘形、柱抜取穴ともに小規模で、柱筋は北で東へ偏る傾向が強い。

SE13330 調査区中央南部で検出した井戸。掘形は遺構面上で径約3mを測る円形で、深さが約3.4mある。この掘形の内側には、径約1.8mの抜取穴があり、井戸枠はすべて抜き取られている。掘形の底から約1mは黒灰粘質土あるいは灰色粘質土の堆積土があり、この上に2.4～2.5mの埋土がある。前者から平安時代初期の土師器杯、椀などが出土した。

表2 第188次調査検出建物の規模

遺構番号	建物番号	棟方向	柱間数		総長		柱間寸法(身舎)		庇の出
			桁行	梁間	桁行	梁間	桁行	梁間	
SB13301	掘立柱建物	南北棟	4	2	8 m	4 m	2 m	2 m	—
SB13302	掘立柱建物	南北棟	3	2	5.7 m	3.6 m	1.8~2 m	1.8~2 m	—
SB13303	東庇付掘立柱建物	南北棟	3	3	5.4 m	6.9 m	1.8 m等間	2.1 m等間	2.7 m
SB13304	東庇付掘立柱建物	南北棟	3	3	5.4 m	6.9 m	1.8 m等間	2.1 m等間	2.7 m
SB13305	東庇付掘立柱建物	南北棟	6	3	11.2 m	6.9 m	1.8~2.2 m	2.1 m等間	2.7 m
SB13306	西庇付掘立柱建物	南北棟	6	3	12 m	6.4 m	1.8~2.4 m	2 m等間	2.4 m
SB13307	東庇付掘立柱建物	南北棟	3	3	5.8 m	7.2 m	1.8~2 m	2.4 m等間	2.4 m
SB13308	西庇付掘立柱建物	南北棟	3	3	5.4 m	6.3 m	1.8 m等間	2.1 m等間	2.1 m
SB13311	南庇付掘立柱建物	東西棟	3	3	5.4 m	7.2 m	1.8 m等間	2.4 m等間	2.4 m
SB13312	南庇付掘立柱建物	東西棟	3	4	6.3 m	7.8 m	2.1 m等間	2.4 m等間	庇 1.5 m 孫庇 1.5 m
SB13313	掘立柱建物	東西棟	3	2	5.4 m	3.6 m	1.8 m等間	1.8 m等間	—
SB13314	掘立柱建物	南北棟	4以上	2	5.4m以上	3.6 m	1.8 m等間	1.8 m等間	—
SB13315	掘立柱建物	南北棟	3	2	4.8 m	3 m	1.6 m等間	1.5 m等間	—

SK 13345 SB13313内部に存在する不整形な土坑。長径約3.2m、短径約2mの不整形で、深さは10cmと浅い。SB13313との関係は不明だが、建物内部に設けられた何らかの施設の抜き取り痕跡である可能性がある。

SK 13340 調査区中央部に存在する径約0.8~0.9mの不整形の土坑である。深さは約15cmで、埋土に平城宮出土軒瓦編年第Ⅲ期の軒瓦をはじめとする瓦片を多量に含む。

SK 13316 調査区中央南寄りで検出した方形土坑。南北70cm、東西88cm、深さ18cmである。壁面と底部は厚さ3cmの固く締った赤褐色焼土がめぐる。堆積土には拳大の礫を多量に含み、瓦片、焼土を混ざる。単なる廃棄物投棄のための土坑ではなく、火を用いて炊事等を行なう炉のような施設であろう。

4 遺物

遺物は調査区の面積に比して少ない。なかでも土器類は少なく、井戸SE13330埋土の底部から出土した平安時代初頭の土師器の杯Aや椀、SK13341から出土した奈良時代の甕、壺の破片などがある。また埴輪の破片は調査区全域から出土している。瓦埴類では軒丸瓦が53点、軒平瓦が31点出土した。平城宮出土軒瓦編

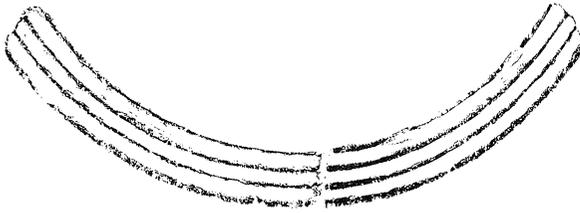


図3 四重弧文軒平瓦（1：5）

年第Ⅲ期に属するものが半数以上を占める。とりわけ軒丸瓦の6225型式と軒平瓦の6663型式が多い。また、SX13335の東を画するSD13319埋土から四重弧文の軒平瓦1点を含む白鳳時代の平瓦片が多量に出土した。

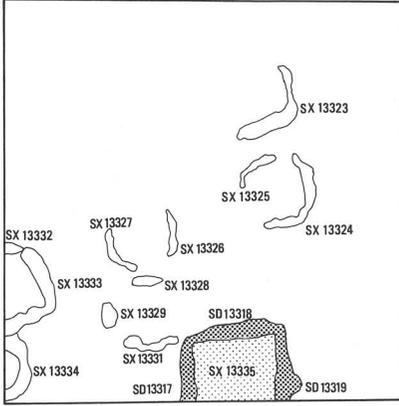
5 遺構変遷とまとめ

今回の調査の結果明らかとなった遺構の変遷と特徴は以下のとおりである。

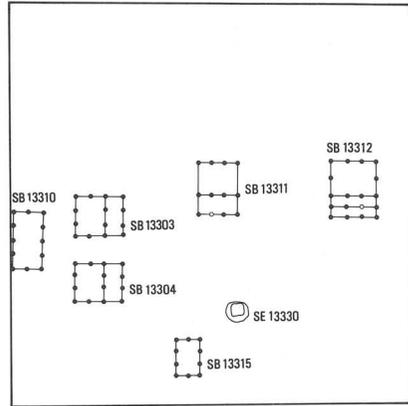
- A期** 北から舌状にのびる丘陵地形の先端付近に数多くの方墳が散在する時期。古墳時代には、平城宮北端の市庭古墳、第二次大極殿下層の神明野古墳をはじめとして、この地が葬地として利用されていたことがわかる。
- B期** 周濠に囲まれたSX13335が存在する時期。周濠から多量の白鳳時代の瓦片が出土したことから、平城宮造営以前に寺院が建立されていたことが推定できる。ただし寺院名を特定できる出土遺物はない。
- C期** SB13300、13310、SX13320、13321、13322が存在する時期。奈良時代。ただし、SB13300、13310などの建物と大形掘形SX13320とが同時期であるかどうかは不明である。
- D期** SB13301以下、計13棟の小規模建物群と、井戸SE13330、土坑SK13316が存在する時期。平安時代初期。建物は、同程度の平面形式をもつものがほぼ同位置で2時期にわたって重複している。両時期ともに建物は井戸と広場をとり囲むように存在する。外構に関連する遺構は検出できなかったが、おそらく1つの屋敷を構成する建物群であろう。平城宮廃絶後まもなく、この地に集落が営まれていたことがわかる。

以上のように、本調査では古墳時代から平安時代にかけての多岐にわたる遺構を検出することができ、この地域の平城宮造営以前から廃都後までの土地利用の変化を明らかにすることができた。

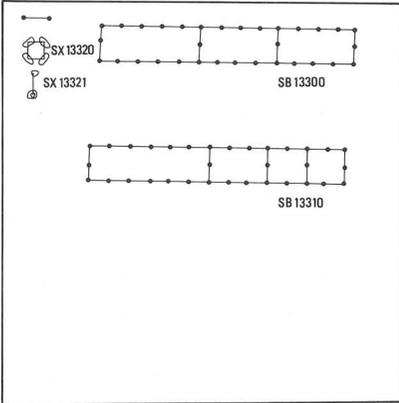
A-B



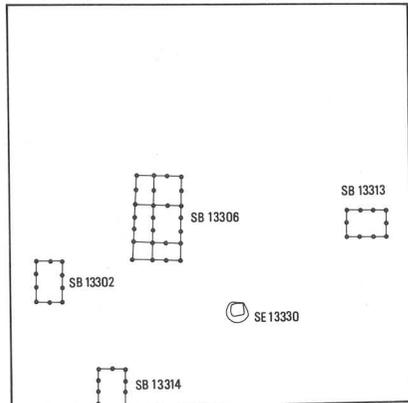
D-2



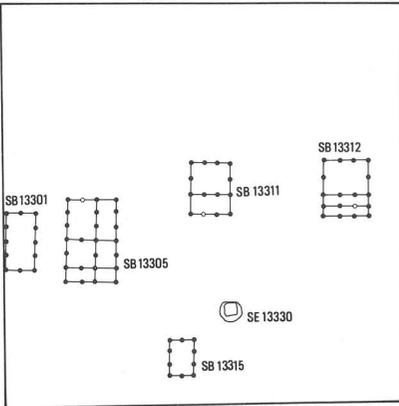
C



D-3



D-1



D-4

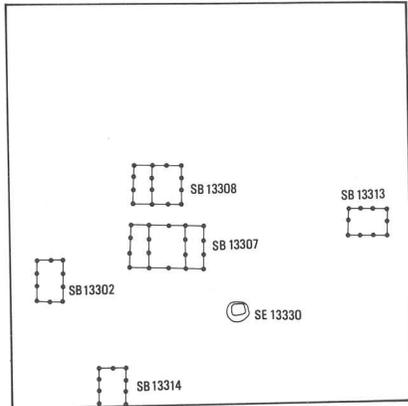


図4 第188次調査遺構変遷図

最後に奈良時代の遺構の性格についてふれておこう。

まず建物SB13300、13310は、柱掘形や柱抜取穴の径が小さく、柱筋も揃わないなど、仮設建物である可能性が極めて高い。儀式に使用された建物としては、第169次調査区で3期の大嘗宮遺構を確認しており、今回の調査区内にはこれに関連する幄舎の存在が想定される。平安時代の『儀式』によれば、大嘗宮の南側に親王、大臣などの控える幄舎の存在したことが知られる。SB13300、13310は、こうした臣下の控所であった可能性が指摘できる。両者は、建物規模こそ同一であるが、南北方向の柱筋が微妙にずれていることや、建物内部の間仕切の位置が異なっていること、あるいはSB13300からの出土遺物が皆無であるのに対し、SB13310は柱掘形や柱抜取穴から比較的多くの軒瓦が出土したことなど、相異点は多い。従って、1回の大嘗祭にSB13300とSB13310とが同時に2棟建てられたと考えるよりは、時期の異なる大嘗祭にそれぞれ1棟ずつ建てられたと解釈する方が自然である。しかし、第169次調査で確認した3時期の大嘗宮のいずれに該当するかはにわかに決しがたい。ただ、SB13300とSB13310は、平面規模や形式が互いに似通っていることから、同一の計画基準に基づいて建設されたことがうかがえるし、出土した軒瓦が第Ⅲ期に属するものが圧倒的に多いことから、両者はともに奈良時代後半期の大嘗宮に伴うものと考えるのが妥当である。

さて、『儀式』には、大嘗祭に際して親王や大臣以下の廷臣が列する幄舎として、5丈の幄を、東西方向に4棟並列することが示されている。これに対し、SB13300やSB13310は東西13間（総長約117尺）、南北2間で、それぞれ平安時代の幄舎1棟の約2倍の面積をもっている。また平安時代の幄舎には明確な間仕切はないが、SB13300、13310は、ともに間仕切が存在する。したがって、奈良時代には、長大な建物内部を分割することによって位階ごとの席次が決められていたが、平安時代に至って建物そのものを2棟に分割したとみることができる。なお、これらの問題点は、本調査区の東に想定される朝堂院東第三堂や、南に想定される第五堂の調査が進み、これらの諸堂と、SB13300、13310とのより正確な位置関係が明らかになれば自ずと解明されることとなろう。（本中 真）

2 第一次大極殿地域の調査 第192次

1 はじめに

本調査は宮内道路付替予定地の事前調査として行なったもので、第一次大極殿西面築地回廊に調査区を設定した。第一次大極殿地域は、すでに東半部について発掘調査がほぼ完了しており、その成果は『平城宮発掘調査報告Ⅺ』（1981）にまとめられている。したがって今回の調査は、この地域が第一次大極殿院の南北を中心にして、西半部が東半部の折返しとして造営されているかどうかを確認する意味あいを持つものとなった。調査面積は、東西39m、南北26mの1,014㎡で、調査期間は1988年7月4日から10月3日（8月6日～21日中断）である。

なお、調査期間が奈良シルクロード国際博覧会開催中であったため、同博覧会の「発掘体験現場」として常時見学者を受け入れた。

2 遺構の概要

調査区は旧水田で、その地形は西半部が東半部より一段低く、北辺中央部には台地状の土盛があった。当初この土盛が、その位置から考えて西築地回廊の基壇の残存部ではないかと予想したが、調査の結果、後世の土盛であることが明らかになった。また、西半部が東半部より一段低いのは、おそらく耕作にともなって削平されたもので、そのため西築地回廊西雨落ち溝はわずかな痕跡すらとどめていなかった。

第一次大極殿地域の遺構の変遷については、前記の学報に詳述されている。それによれば、この地域の遺構はⅠ、Ⅱ、Ⅲの3期に大きく分けられ、さらにⅠ期がⅠ-1～Ⅰ-4の4小期に、Ⅲ期がⅢ-1、Ⅲ-2の2小期に分けられる。比定される年代は、Ⅰ-1期が和銅創建時、Ⅰ-2期が神亀～天平初年、Ⅰ-3期が恭仁京遷都の時期、Ⅰ-4期が平城遷都後の天平17年～天平勝宝5年、さらにⅡ期が天平勝宝5年以降長岡遷都（784）までの30年余り、Ⅲ-1期が9世紀の初頭、平城上皇の時代、Ⅲ-2期が平城上皇の親王に平城西宮が賜与された天長2年（825）以降である。各期の遺構配置は図5のとおりである。

以下、今回の調査区において検出された遺構を各期ごとに述べる。

I - 1・2期

SH6603A 殿舎地区と南門SB7801の間にひろがる礫敷の広場である。今回の調査区では、灰白色砂礫の地山の上に明茶白粘土を5～10cmの厚さで敷いたうえに径5cmほどの礫を敷き、さらにその上に径1cm内外の小礫を厚さ5～10cmに敷いている。これは時期差というよりも施工手順と考えた方が妥当かもしれない。この広場は、第I期をつうじて礫敷広場として存続し、南面築地回廊が今回の調査区よりも北へ寄せられるII期、さらにIII期まで礫敷の状態であったと見られる。

SC13400 第一次大極殿西面築地回廊。これは東面築地回廊（SC5500）に対応するものである。基壇上面は削平されて、ほとんど痕跡をとどめないが、掘込み地業が残る（図6）。調査区南端で残存する地業は深さ55cm前後で、色調の異なる粘土を6層（厚さ各5～10cm）版築している。ただし、SC5500では中心に

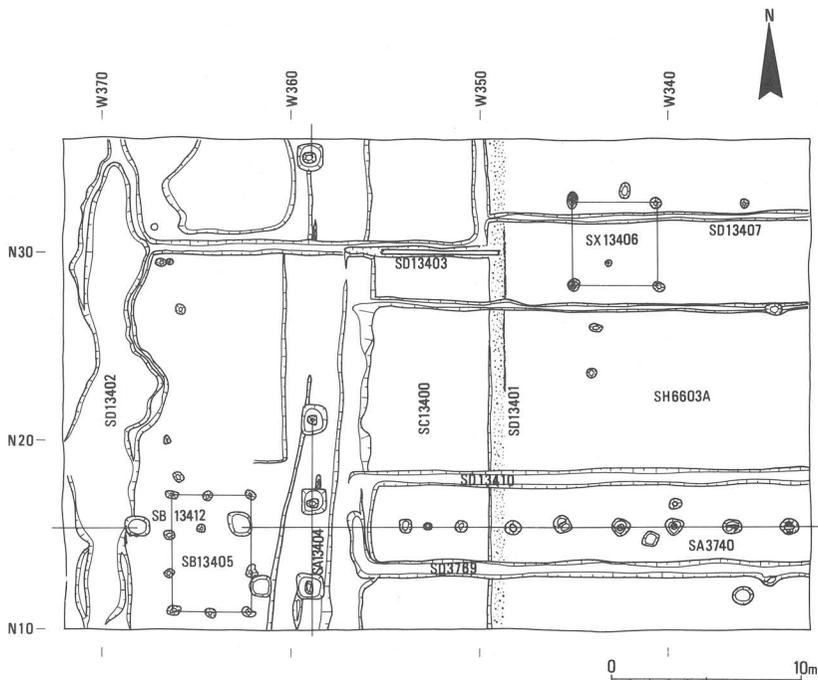


図5 第192次調査遺構配置図（1：400）

約3m幅を掘り残しているが、SC13400ではそういった施工状況は見られなかった。基壇の位置は基壇上面が削平されているが、SC5500（W183.7～W172.9、中心W178.3）を中軸線で折り返したW360.9～W350.1、中心W355.5と考えてよい。これは後述する西面築地回廊東雨落ち溝SD13401やI-3期の掘立柱塀SA13404との位置関係などがその証左となる。なお、このSC13400はI-3期に解体されるが、I-4期には再建される。

SD13401 西面築地回廊の東雨落ち溝。溝幅は約80cmで、東面築地回廊の西雨落ち溝（SD3790）を中軸線で折り返した位置と正確に一致する。東端に径10cm前後の石を一行に並べて見切りとし、築地回廊側（西側）にはそれよりやや小さい礫を敷く。SD3790の溝底の礫敷は上層、下層に分かれているが、SD13401では明瞭に確認することはできなかった。なお、SD13401は、第I期をつうじて存続する。

SD13402 調査区西端を流れる南北溝。幅1.5～3mの素掘溝で、堆積土（灰色砂）には、藤原宮式、平城宮軒瓦編年第I、II期の軒瓦および平城宮土器編年IVの土器を含み、埋土（灰色粘土）には平城宮軒瓦編年III期の瓦を含む。この溝は、東外郭において奈良時代初期にごく短期間使用された南北溝SD3765を中軸線で折り返した位置にあることから、和銅創建時に計画的に掘られたものと考えておきたい。ただし、遺物から見て、II期においても溝として機能していたことは明らかであり、存続期間は長い。

I-3期

SA13404 西面築地回廊西側柱に重なる位置にある掘立柱南北塀。東面におけるSA3777に対応する。これは恭仁京遷都時にあたるこの時期に、第一次大極殿

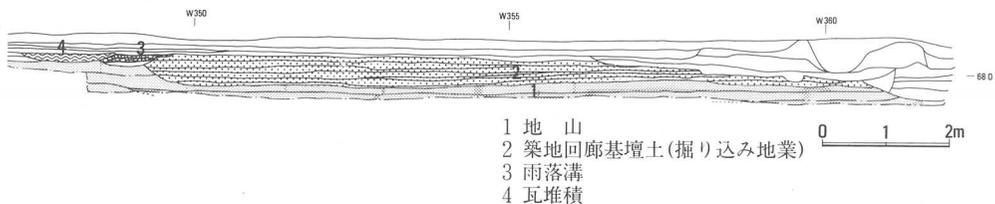


図6 SC13400断面図（1：120）

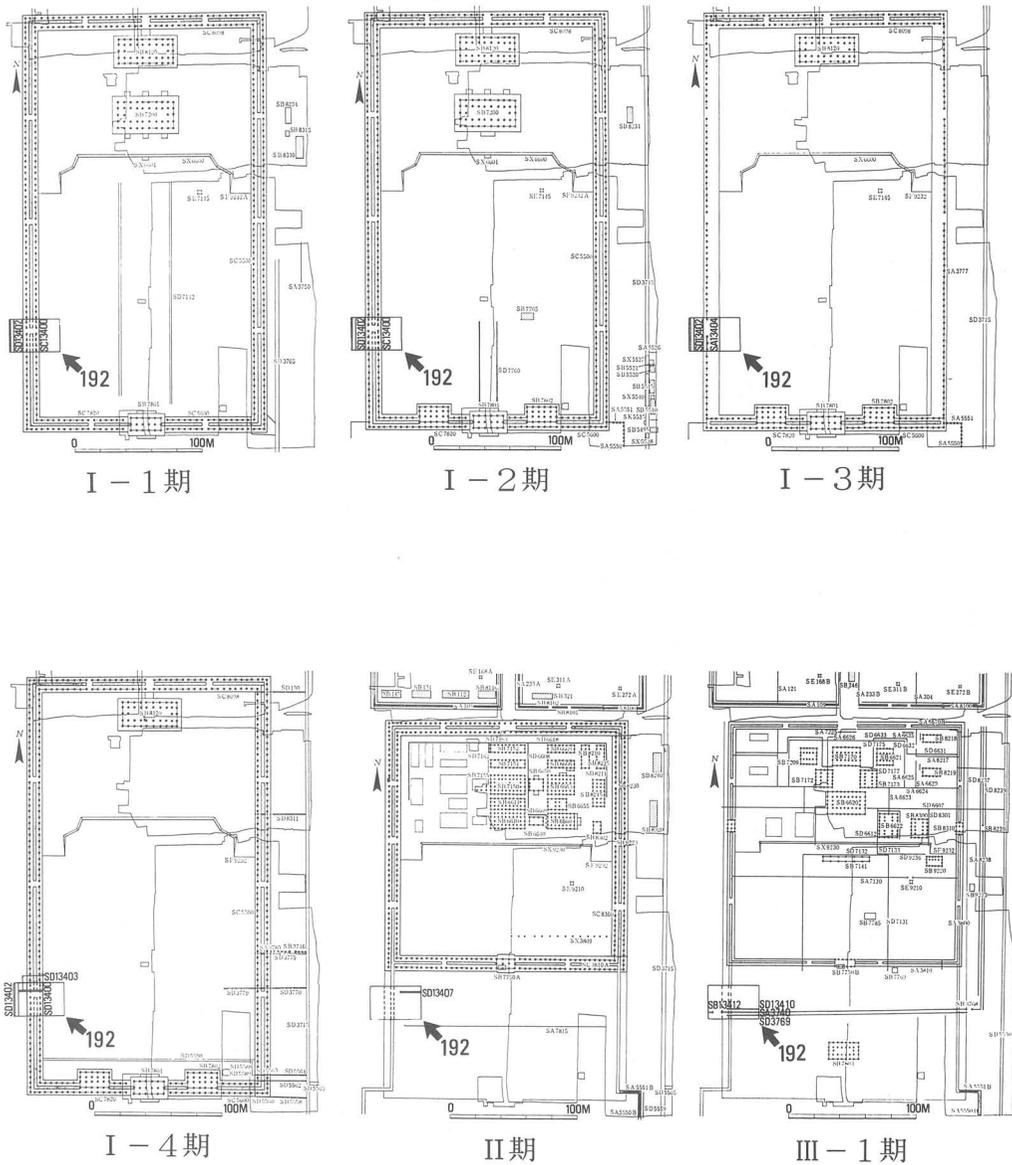


図7 第一次大極殿地区遺構変遷図

地域を区画する施設として建設されたものである。柱間は15.5尺（約4.6m）等間で、掘形は一辺1.2～1.5m内外の方形または長方形、底には磚を敷いて礎板とする。東側のSA3777では磚の礎板は見つかっていない。礎板を使っているという

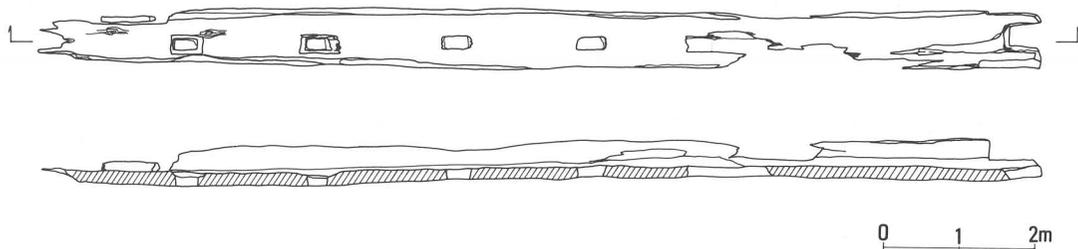


図8 SD13403木樋暗渠（1：100）

ことは、第一次大極殿地域の西側のこの一帯が比較的低湿であったことを物語っているのであろう。また、本調査区で南から3番目の柱穴（N21.2）と4番目の柱穴（N34.8）の間は、3間分かっており、広すぎるきらいはあるが、この南北塀に開く門が設けられていたと考えておきたい。ただし、SA3777では、対応する位置に開口部はない。

SB13405 調査区西南部、SD13402の東側にある桁行3間、梁間2間の掘立柱南北棟。柱間はいずれも7尺（2.1m）である。SA13404の開口部との位置関係から、この時期のものとしておく。

I - 4 期

SD13403 SD13401を東端とし、SC13400を横断してSD13402に注ぐ東西方向の木樋暗渠。中軸線で折り返した位置にある東西木樋暗渠SD3770と同様、築地回廊内の水を排水する機能を持つ。幅80cm前後の溝を掘り、そこに木樋（径45cm、内法幅35cm、同高さ15cm）を据えるという構造である。

木樋が残存しているのは、東端から約6.5m分だけであるが（図8）、SD3770が全長木樋暗渠であることや、本調査区では築地回廊中央部以西の削平が著しいことなどから、おそらくこのSD13403も全部木樋暗渠であったものと推定される。木樋は丸柱を転用したもので、その材質はコウヤマキである。前述したI - 3期のSA13404との前後関係は、交差する地点にSA13404の柱穴がなかったため、直接確認することはできなかったが、東面においてSD3770がSA3777の柱穴を掘り込んでいることから、このSD13403もSA13404のあったI - 3期より後の時期で、かつこの地点に築地回廊が残存していたI - 4期の遺構と考え

られる。

Ⅱ 期

SD13407 広場内N31.7の位置にある東西溝。SD13401を切っており、一応Ⅱ期の遺構としておく。

Ⅲ - 1 期

SA3740 平城上皇の時期の東西塀。柱間は9尺(2.7m)ないしは10尺(3.0m)で、本調査区では7間分(W333.7~W353.8)を検出した。以前の調査で、このSA3740は東外郭に延びていることが明らかになっており、今回は後世の削平により検出できなかったものの、西外郭に延びていたものと考えられる。このことは、門SB13412の存在が傍証となる。

SB13412 SA3740に開く1間の門。柱間寸法は18尺(5.4m)で、東外郭でSA3740に開く門SB3768に対応する。

SD3769・SD13410 SA3740の南と北、それぞれ2.5m前後のところに掘られた素掘りの東西溝。幅約0.8m・深さ0.1mで、西側に排水したものと見られる。検出したのは、Ⅰ期の西面築地回廊SC13400上までであるが、SA3740に伴う溝であるので、西外郭へ延びていた可能性が大きい。なお、以前調査した第一次大極殿地域東部ではSA3740の北側の溝は認めていなかったが、SD13410の延長線上のW181.5~W170.9で同規模の溝を検出しており、これがSD13410と同一の遺構であると見てよいだろう。

3 遺 物

瓦は主に西面築地回廊東雨落ち溝SD13401の東側及び調査区西端の南北溝SD13402内から出土し、相当量の丸・平瓦のほか軒丸瓦17点、軒平瓦12点、鬼瓦2点、熨斗瓦1点、隅切平瓦1点を数えた。軒瓦29点を年代別に分類すると、藤原宮式7点、平城宮軒瓦第Ⅰ期(710~724)4点、同第Ⅱ期(724~745)5点、同Ⅲ期(745~757)7点、型式不明6点となり、藤原宮式と第Ⅰ期の軒瓦で40%近くを占める。これらの古いタイプの瓦は西面築地回廊SC13400の建設当初に用いられたものであろう。また、南北溝SD13402では、堆積土(灰色砂)か

ら藤原宮式及び第Ⅰ・Ⅱ期、埋土（灰色粘土）から主として第Ⅲ期の瓦が出土している。

土器は、全体にきわめて少量である。特に築地回廊内（SA13400以東）では遺構に伴うもので見るとべきものはほとんどなく、わずかに木樋の埋土と柱抜取穴に若干の小片があるだけである。これは遺構の性格上、当然ともいえる。比較的まとまって出土したのは南北溝SD13402で、堆積土（灰色砂）からのものが多い。土師器の杯、皿、甕、須恵器の杯、皿、鉢、甕などで、平城宮土器編年Ⅳ（753～775）が主体である。ほかに溝底から墨書土器が2点出土した。

4 まとめ

今回の調査によって得られた知見は以下のとおりである。

1) 東面築地回廊SC5500と西面築地回廊SC13400、東面築地回廊西雨落ち溝SD3790と西面築地回廊東雨落ち溝SD13401及び東面南北掘立柱塀SA3777と西面南北掘立柱塀SA13404は第一次大極殿地域の中軸線W266.9を軸として正確に折り返した位置にある。

また、Ⅰ－Ⅳ期に築地回廊内からの排水のために設けられた木樋暗渠（東SD3770、西SD13403）も東西対称の位置にある。

2) 東面築地回廊SC5500の基壇掘込み地業は、中心に約3m幅を掘り残し、その左右にそれぞれ約3.5m幅の布掘り地業を行っている。

いっぽう、西面築地回廊SC13400では中心部の掘り残しはなく、一様に掘り込み地業を行っている。

3) 西外郭における南北溝SD13402は、東外郭の南北溝SD3765と対応する位置にあるが、SD3765が平城宮創建当初のごく短い期間しか使用されなかったのに対して、この溝はⅡ期（天平勝宝5年から長岡京遷都まで）まで使用されている。

4) Ⅲ－Ⅰ期（平城上皇の時期）の東西塀SA3740は、南側の溝SD3769だけでなく、北側にも溝SD13410を伴っていた。

（小野健吉）

3 馬寮東方地区の調査 第194次

1 はじめに

第194次調査は、整備管理棟移転のための事前調査として実施した。調査区は、馬寮地区と第一次大極殿地区のあいだにあって、佐紀池の西南方に位置する。

本調査に関連するこれまでの調査には、第194次の南隣で、昭和42年に実施した第37次調査がある。第37次調査では、東西に広い4,300㎡の発掘区東半で、南北棟の礎石建物1棟、東西棟の掘立柱建物2棟を検出したほか、敷地全体の南限を画する東西塀や東西溝などを発見している。このうち、布掘りの礎石地業を伴う南北棟の礎石建物SB5300は、南側の妻から桁行7間までが検出され、さらに北側へのびることが予想されていた。第194次の発掘区は、この礎石建物の真北に連続している。整備管理棟の計画はSB5300の配置を活かすことを前提としていたので、第194次調査に課された課題の大半は、この礎石建物の規模と構成を確かめることにあった。

発掘区は、当初、東西25m×南北40m（1,000㎡）という縦長のトレンチを設定した。しかし、この礎石建物が発掘区内に納まりきらない、長大な規模をもつことが明らかになったため、発掘区を北側に20m拡張して建物の北限をみきわめるとともに、南側にも12m拡張して第37次調査区で検出された遺構との連続性を確認した。以下、礎石建物遺構SB5300を中心に、発掘成果の概要を報告する。

2 礎石建物とその関連遺構

(1) 礎石建物SB5300

礎石建物SB5300は、東西両面に庇を伴う南北棟で、梁間4間、桁行は実に21間に及ぶ。今回の調査では、そのうち北側の15間を検出した。建物の総長は梁間で12.0m、桁行で86.4mである。従って、柱間寸法の平均は梁間で3.0m（10尺）、桁行で4.1m（14尺）となる。

礎石は、まったく残っていない。しかし、柱位置には、30個以上の川原石を円状に配列した根石がほぼ完存している。根石は、たんに円周上に並ぶのではなく、

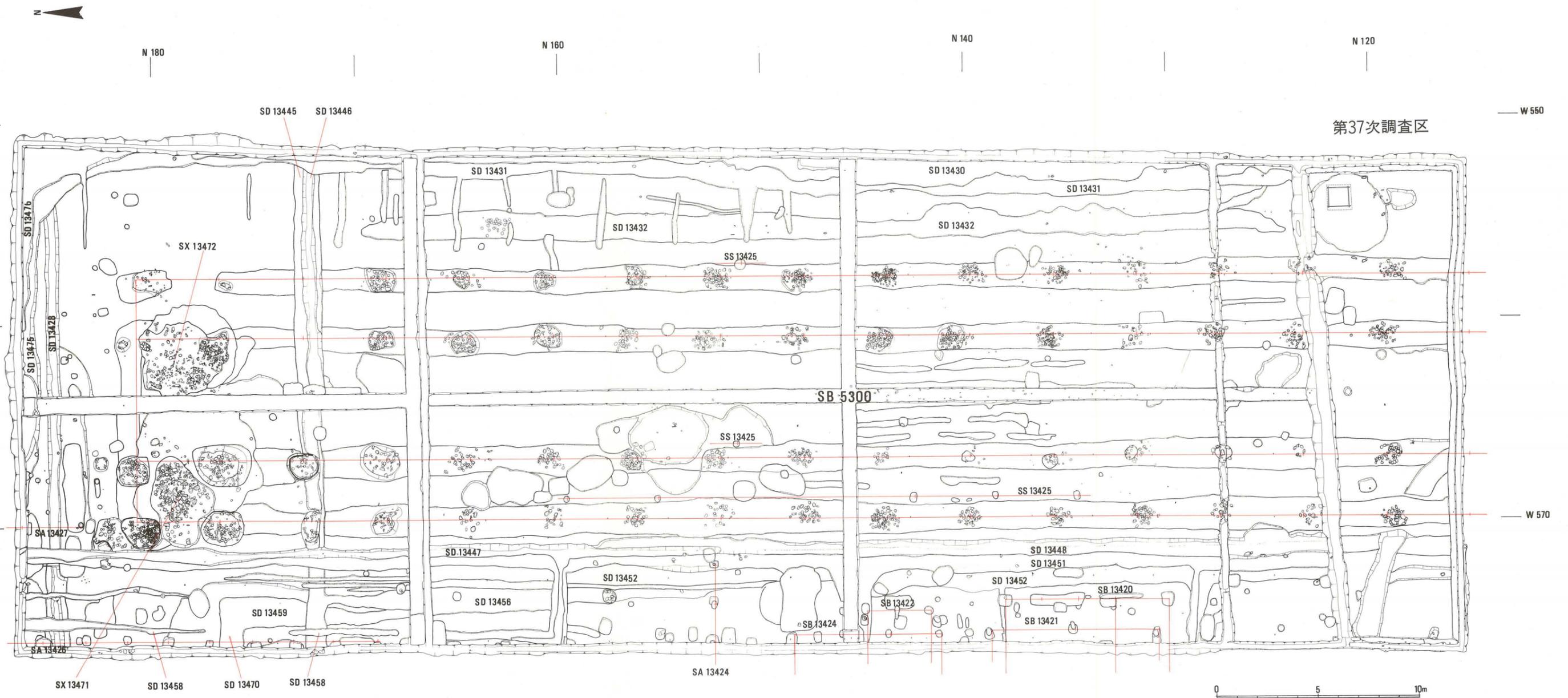


図9 第194次調査遺構配置図(1:200)

かなり乱雑な感じで面的に敷き詰められている。根石・礎石を据えつけるにあたっては独立した掘形を設けず、布掘りの溝状掘形を柱筋にそって通している。布掘りが掘られているのは、東西両面の側柱筋と入側柱筋、及び南北両妻の筋である。その幅は約1.2m（4尺）で、根石まわりに少しふくらみをもつところがある。遺構検出面である根石面からの深さは、わずか20～30cmにすぎない。築地や基壇の地業として、ふつう版築が施されるが、SB5300の場合、その痕跡はまったく認められない。なお、第37次調査では、南妻の筋で棟持柱下の根石を検出している。しかし、今回の調査では、北妻側を含む棟筋で、根石や柱掘形を発見できなかった。このことは、北妻の構造が南妻とは異なること、そして長大な建物内に間仕切りの存在しなかったことを暗示している。

ところで、宮内最大の建築規模を誇る第一次朝堂院東第二堂（SB 8550）は、桁行21間の東西2面庇つき南北棟礎石建物であり、SB5300と瓜ふたつの平面構成からなっている。ただし、SB8550は柱間寸法が梁間で3.4m（11.5尺）、桁行で4.4m（15尺）、総長では13.6m×92.4mで、SB5300よりひとまわり大きい。また、SB8550では布掘りと壺掘りを複雑に施す。しかし、それは版築を伴う基壇下の地業であって、根石や礎石を据えつける掘形としての役割は担っていない。東第二堂の根石と礎石は、基壇を積み上げる過程のなかで、皿状の掘形を掘って据えつけられている。基壇高については、東第二堂の場合、階段の出などから約1.2m（4尺）と推定している。一方、SB5300では、基壇や階段の明確な痕跡は認められなかった。しかし、後述するように、基壇地覆石の抜取り穴を活用して通したと思われる南北溝SD13447・13448があり、SB5300が基壇を伴ったのはまちがいない。また、基壇周囲の崩落瓦層から周囲の生活面が復元でき、さらに根石上にある礎石の大きさから推定して、その基壇高は2～3尺と思われる。

以上のように、SB5300は、規模と格式にやや見劣りする点があるとはいえ、第一次朝堂院東第二堂に比肩されるべき建築遺構ということが出来る。このような破格の規模と構造を備えた礎石建物が、宮内西北方のこの地区で、どのような用途を担っていたのか。それを知る決定的な手がかりは、今のところ得られて

いない。

SB5300の存続年代については、遺物の大半を占める瓦の年代観が最も参考になる。出土した軒瓦は、第Ⅱ期の初めから第Ⅲ期にかけての型式が90%以上を占めている。また、第Ⅱ・Ⅲ期のなかで、軒平瓦・軒丸瓦の明解な組合せが3組認められた。この点から考えて、SB5300は、奈良時代前半から後半にかけて、比較的長いあいだ存続したものと推定できる。なお、第37次調査の報告は、SB5300の基壇周辺とSD5280から藤原宮式及び興福寺式の軒瓦が出土したことを重視して、建物の創建が平城宮造営当初に遡るという見解を示している。しかし、今回の調査区では、藤原宮式及び第Ⅰ期の軒瓦は出土軒瓦全体の7%しかない。また、SB5300が、神亀元年（724）頃の建立と推定される第一次朝堂院東第二堂に先行するとも考えにくい。ここでは、SB5300の始まりを、神亀元年以降で恭仁京遷都以前の天平年間前半頃に想定しておく。

このように、SB5300は、奈良時代の前半から後半にかけて存続した礎石建物とみなすことができる。ただし、恭仁京遷都から平城遷都にかけての前後に、大きな改修を行なった形跡がある。北妻から3列めの柱筋には、布掘りを切る東西溝が流れている。この溝には、下層SD13445と上層SD13446があり、上層からは軒丸瓦6225A・C型式－軒平瓦6663C型式が出土している。したがって、溝の廃絶は平城遷都後とみてまちがいはない。その溝を覆うように、2ヶ所で新しい根石が検出されている。

一方、溝の北側では、当初の布掘りより新しい遺物包含層が比較的広範囲にひろがっている。さらにその層を掘り込んで根石が4カ所に配置され、池状の石敷遺構SX13471と築山状の石敷遺構SX13472も包含層上にある。以上の新しい6ヶ所の根石は、いずれも西側の側柱筋と入側柱筋にのみ認められる。それらは布掘り当初の根石とほぼ同じ位置にあるが、布掘り自体とは関係なく、単独の浅い掘形を伴っている。また、新しい根石と池状及び築山状の石敷遺構は、いずれも白色土混じりの粘土層を下地とし、その上に薄い砂質土の層を敷いて石を固定するという共通の技法を採用しており、同時期の工程であることを反映する。ま

た、池状の石敷遺構からは、6133 J 型式の軒丸瓦、6663 C 型式の軒平瓦など第三期の軒瓦が出土している。

以上の知見により、次のような結論が得られる。SB5300は、当初、桁行21間の規模であった（A期）が、恭仁京遷都前後の時期に北端の3間が撤去されて、桁行18間の規模に縮小された（B期）。しかし、平城遷都後、再び桁行21間の当初規模に回復され（C期）、その後奈良時代後半のある時期に廃絶した（D期）。この、部分撤去から再増築にかけての転変は、佐紀池に近接する建物北端周辺の地盤の脆弱さに因を求められるだろう。建物北妻から南側にひろがる粘土質の新しい包含層や石敷遺構は、脆弱な地盤を補強し基壇の下地となる役割りを担ったもの、とみなされるからである。

なお、桁行方向の布掘りにそって、礎石の東南側にいくつかの小穴がみられる（SS13425）。それらは、部分的な検出にとどまったが、桁行の柱間と同じ14尺等間で配列されており、礎石建物創建時の足場穴と思われる。

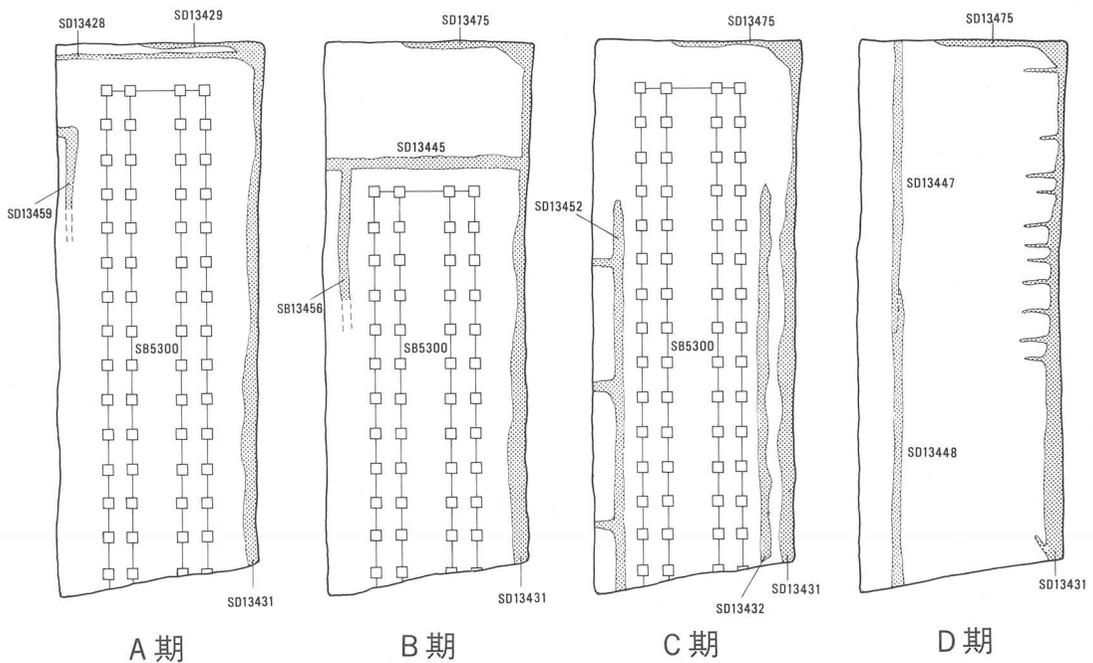


図10 SB5300と溝の変遷

(2) 溝の変遷

礎石建物SB5300に関連する多数の素掘り溝が検出された。建物の改修工程に対応した溝の変遷過程を時期別に整理しておく。

A期 奈良時代前半。布掘りを伴う礎石建物が、桁行21間の当初規模を有していた時期。

SD13428 礎石建物当初の北妻の約3m北を流れる東西溝で、幅は50cm前後と狭い。礎石建物当初の北妻に対応する最古の溝である。

SD13459 最古の南北溝で、ごく限られた範囲でしか検出されていない。礎石建物当初の西雨落ち溝と思われるが、側柱筋から4.5mと、離れすぎている。北端で東西溝SD13470と合流する。

SD13475 発掘区の北端を流れる東西溝で、埋土にはいくつかの堆積層がみられ、あるいは池の南岸部分である可能性がある。この溝に接するトレンチ北端の排水溝から、埴輪片が出土した。

SD13431 発掘区の東壁に沿って流れる下層南北溝である。SD13475から水を引き入れるようになっている。SB5300の東雨落ち溝としては4.2～5.3mと側柱筋から離れすぎているが、建物の東面に対応する溝と考えられる。6291A型式－6681C型式の軒瓦（第Ⅱ期）が出土している。

B期 恭仁京遷都前後から平城遷都後までの時期。礎石建物は、北端3間を撤去し、桁行18間に縮小する。A期の溝のうち、SD13475と13431がB期に存続する。

SD13445・13446 既述のように、北妻から3列めの柱筋で布掘りより新しい東西溝で、下層と上層の2時期がある。上層からは、6225A・C型式－6663C型式の軒瓦が出土している。縮小した礎石建物の北妻に対応する溝であろう。水は西から東に流れ、SD13431に注ぎこむ。

SD13456 礎石建物西側柱筋の約3.5m西を流れる南北溝で、縮小した礎石建物の西雨落ち溝と思われる。北端でSD13445とT字形に接続する。

C期 奈良時代後半。礎石建物が、再び桁行21間に回復した時期である。SD

13475・13431はなおC期に存続する。

SD 13451・13452 21間に復活した礎石建物の西雨落ち溝。SD13451は、その上層の溝にあたる。奈良時代半ば頃の土器片（平城宮土器Ⅲ）が出土している。SD13452は下層溝で、この溝の心は、上層溝の心より約80cm西側にあり、それだけ側柱筋から遠い。北半では、下層溝の西端で側石の抜取りと思われる細長い溝状の遺構を検出したが、南半では検出できなかった。

SD 13432 21間に復活した礎石建物の東雨落ち溝で、西雨落ち溝のうち、SD13452と対称の位置関係にある。

D期 礎石建物廃絶後の時期。奈良時代後半以降。

SD 13447・13448 SB5300が廃絶したのち、基壇地覆石の抜取り穴を活用して通す南北溝である。地覆に使われた凝灰岩の切石が溝底に残るところもある。SD13447が上層、SD13448が下層である。

SD 13430 SD13431の上層の溝である。奈良時代末期の土器が出土した。SD13431には、C期の東雨落ち溝SD13432を切る東西小溝が数条流れこんでおり、D期のある段階まで存続している。

SD 13476 SD13475の上層の溝である。東端でSD13430と合流する。

3 掘立柱建物と塀

礎石建物と溝以外に、4棟の掘立柱建物、3条の掘立柱塀を検出した。これらの建築遺構は、2～3期の建て替えを反映するものであり、SB5300と共存するものもあれば、その廃絶後に建てられたものもあるとみられる。しかし、検出した遺構は、建物や塀のごく一部分にすぎず、相互の切合い関係も皆無である。変遷の過程をたどることができないので、各遺構を個々にとりあげるにとどめる。

SB 13420 南庇つきの東西棟。東妻とその一筋西側の柱列のみ検出した。梁間は、身舎が6尺等間の3間、庇の出が9尺。桁行柱間は8尺である。身舎中央の2柱穴は、上層で布掘りになっていた。

SB 13421 梁間2間の東西棟。梁間の柱間は14尺等間である。東妻のみ検出した。柱掘形の径は小さいが、深さは検出面から1m近くある。

SB13422 梁間2間の東西棟。梁間の柱間は7尺等間。東妻のみ検出した。

SB13423 梁間3間の東西棟。梁間の柱間は8尺等間。東妻のみ検出した。

SA13424 東西塀。6尺5寸等間。2間検出した。

SA13426 北側の発掘拡張区西壁に沿う南北塀。7尺等間で、8間を検出した。B期の東西溝SD13445より新しく、C期以後の遺構といえる。SD13458が東雨落ち溝となる。

SA13427 10尺等間の南北塀で1間のみ検出。A期の東西溝SD13428を切っている、B期以後の遺構といえる。

4 遺物

出土遺物は、土器が少なく、瓦埴類が大半を占める。

軒瓦は、全部で198点出土した。うち、軒平瓦102点、軒丸瓦96点。ほかに鬼

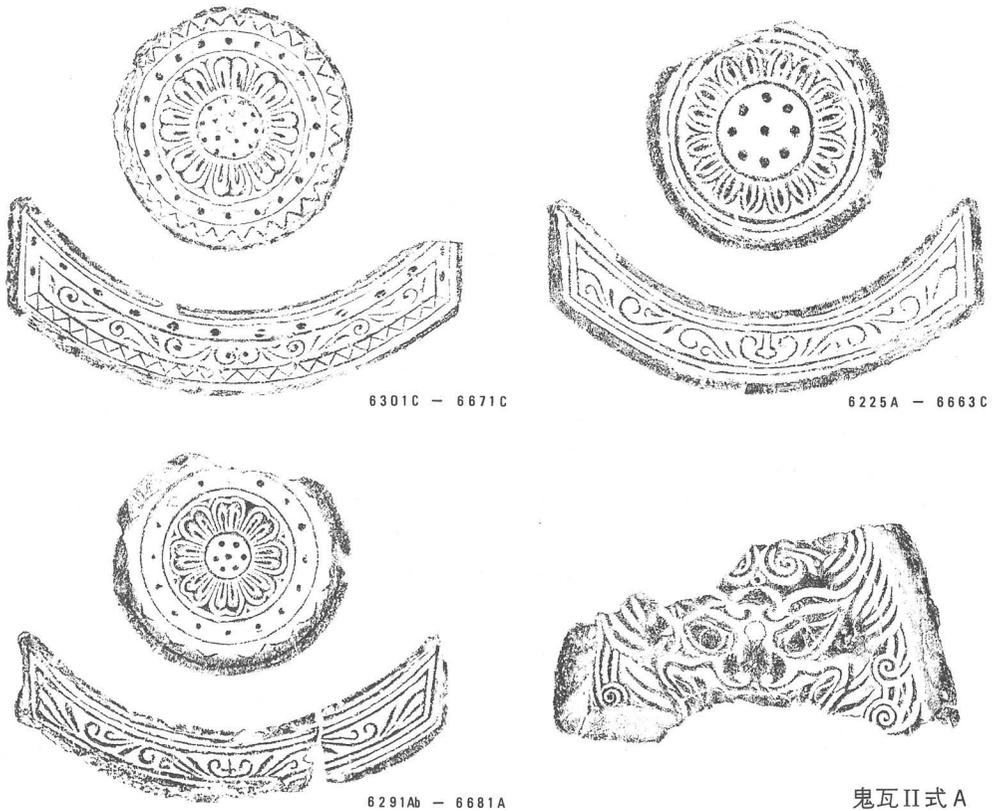


図11 第194次調査出土軒瓦(1:5)・鬼瓦(1:8)

瓦（第Ⅱ期）3点、面戸瓦4点も出土している。軒瓦の時期別出土数を、総数（軒丸瓦点数・軒平瓦点数）として示すと、藤原宮式及び第Ⅰ期=12（1・11）、第Ⅱ期=98（53・45）、第Ⅲ期82（44・38）、第Ⅳ期=2（0・2）となる。軒丸瓦と軒平瓦の組合せは、出土した点数の比率から第Ⅱ期初めの6301C-6671C、第Ⅱ期後半の6291A-6681B・C、第Ⅲ期の6225A-6663Cが明確である。このほか、第Ⅲ期に6282-6721の組合せも認められるが、量はきわめて少ない。

また文字資料としては、「来」という一文字の記された墨書土器が当初発掘区の南排水溝で出土したが、意味は不明である。

5 まとめ

最後にいくつかの問題点を整理しておきたい。

（1）礎石建物の布掘りについて

SB5300の基礎になぜ布掘りを用いたのかは、いまひとつ釈然としない。既述のように、第一次朝堂院東第二堂は基壇下に布掘りの地業を伴い、礎石は基壇内部に据えつけられている。すなわち、そこでは地業の工程と礎石掘形の工程が分離・独立しているのである。これに対して、SB5300の布掘りは、おそらくその両工程を一工程に省略することをめざして掘削されたものではないか、と推定される。ところが、布掘り内部の土層には、版築の痕跡がみられない。SB5300の布掘りは地業としての機能を充たさない、単なる礎石の掘形にすぎないのである。これでは布掘りを施したことの意味がない、といってもいい。

この矛盾については、とりあえず以下のような解釈を与えておきたい。基壇を築く前段階では、地業と礎石掘形の両工程を一工程としてこなすことが目論まれ、布掘りを行なった。しかし、掘削後、何らかの理由で、布掘りを版築地業にすることが放棄された。その代わり、柱の沈下をふせぐため、礎石下に通常よりはるかに多い川原石を根石として敷き詰めた。こう考えると、根石がかなり乱雑に配されて面的なひろがりをもつことについても一応納得できる。いずれにせよ、あまり質のよい仕事とはいえないだろう。

(2) 礎石建物の性格

これまで第一次大極殿・朝堂院地区以西の宮域は、「西方官衙」地区として漠然とイメージされてきた。しかし、今回発見した桁行21間東西2面庇付きの礎石建物によって、その地区像に再検討を加える必要が生じてきている。少なくとも、この破格の規模と格式を備える礎石建物を、一般的な官衙とみなすことはできないだろう。おそらく、天皇が御して儀式や祝宴を催した複合施設の一部であったものと思われる。しかし、具体的にその殿舎を比定するとなると、容易ではない。SD5300の周辺地域に関する史料の記述によると、以下のような候補が想定されるが、いずれも決め手を欠いている。

- ①『続日本紀』養老年元（717）四月二十五日の条にみえる「西朝」。
- ②『続日本紀』天平十年（739）七月七日の条にみえる「西池宮」。
- ③天平勝宝元年（749）以後、とりわけ称徳天皇の代にその名が頻繁に文献に登場する「西宮」。
- ④平安宮宮城図の該当地域近くに描かれた「武徳殿」。

この中では、②の「西池宮」がSB5300の当初建築と年代観が一致しており、それに関係する可能性を否定できない。『続日本紀』には、「天皇、大蔵省に御して相撲を覧る。晩頭に転じて西池宮に御す。因て殿前の梅樹を指し、（中略）宜しく各春意を賦して此の梅樹を詠ずべし」と勅を下したところ、「文人卅人詔を奉けてこれを賦す」と記されている。すなわち、西池宮は大蔵省に近接する、苑池を伴った宮殿である。一方、現・佐紀池は、第101次調査によって、奈良時代の苑池であったことが判明している。また、平安宮宮城図の中央北端に描かれた大蔵省との位置関係からしても、現・佐紀池が奈良時代の西池であったとする推定は十分成り立ちうるだろう。さらに、SD13475が池の一部であった可能性を残している点にも、留意しておく必要がある。

以上のように、SB5300は西池の近くに立地した礎石建物と思われるが、その規模や構造から判断すると、苑池内部の建物であったとは考えにくい。かりにSB5300がこの西池宮に関与する建物であったとすれば、それは池の周辺に形成さ

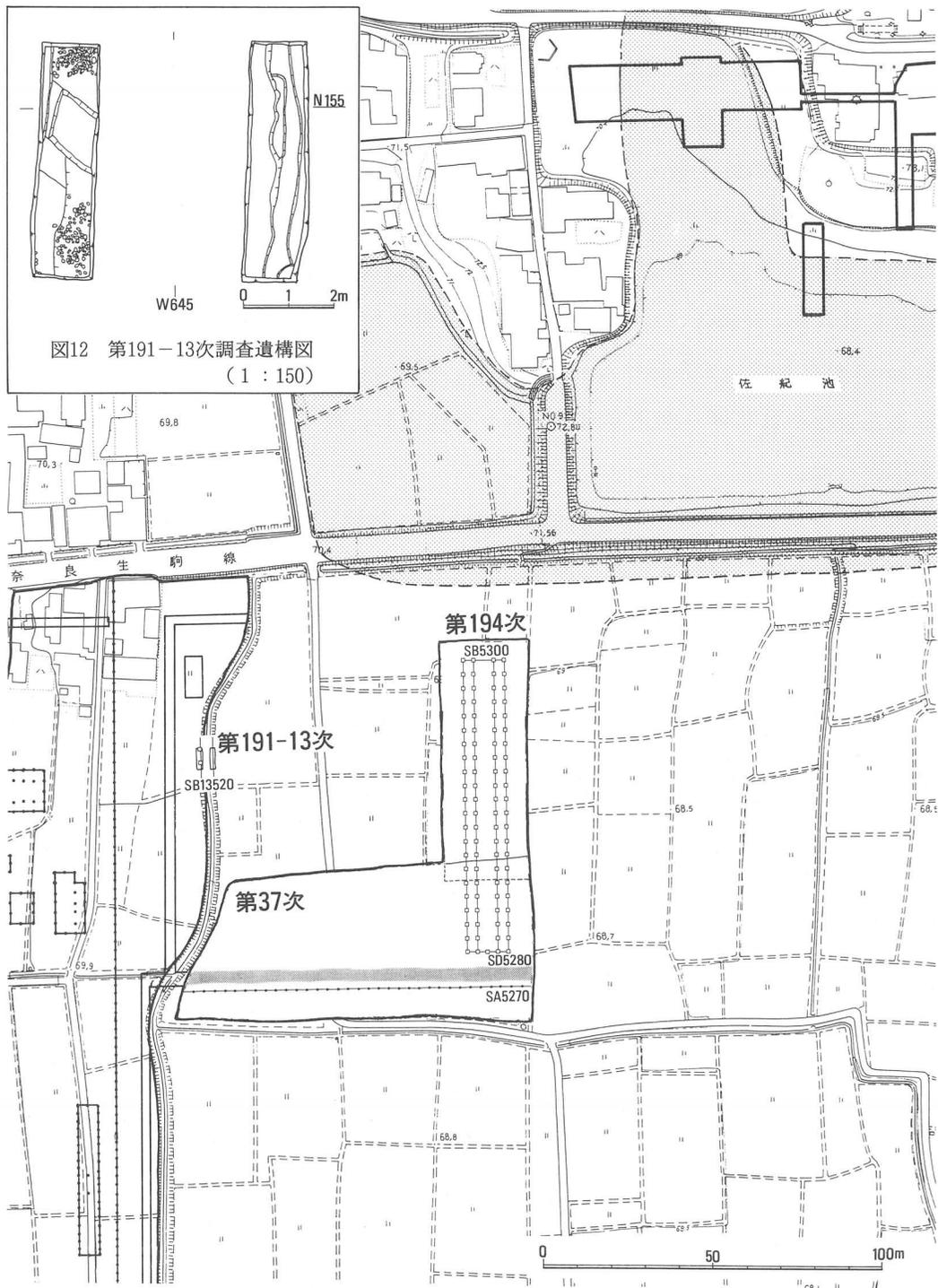


図13 SB5300と佐紀池 (1 : 2000)

れた苑池地区の前方に配置された前殿で、公式行事をおこなう複合施設の一部（おそらく朝堂に類する脇殿）であったのかもしれない。

（3）第191－13次調査の新知見と調査区の性格

第194次調査の終了後しばらくして、整備棟への西からのアプローチとなる橋を水路上に架ける工事の事前調査（第191－13次）をおこない、ここでも南北棟の礎石建物SB13520を発見した。水路は、第194次調査区の西約80mの位置を南北に流れる。発掘区としては、橋の基礎を固めるため、水路の東西両岸に1.2m×5.0mの南北トレンチを設けた。このうち、西トレンチの南北両端で、根石と思われる石敷とそれに伴う南北方向の布掘りを検出し、東トレンチでも布掘りの一部を検出した。

西トレンチにおける根石の間隔は約4.1m（14尺）。SB5300の桁行柱間寸法に一致する。一方、梁行方向の布掘り間隔もやはり14尺前後のようである。これについては、SB5300の梁行柱間寸法（10尺）をひとまわり上回っている。また、SB13520では、根石1個の大きさが拳大で、SB5300にくらべるとかなり小さい。その代わりに、敷かれた石の数が多く、その範囲もいささかひろくなっている。

根石の位置はSB5300の北妻から7筋めと8筋めの柱位置に対応し、両礎石建物の梁行柱筋はほぼそろっている。しかし、東西両トレンチを真南に延長すると、第37次調査区の西端につきあたるが、そこに建築遺構の痕跡はまったくない。したがって、SB13520の南妻はSB5300のそれよりもかなり北側にあることになる。

以上みてきたように、SB13520はSB5300と同じ桁行柱間寸法をもち、梁行柱筋のほぼ一致する南北棟の礎石建物と推定できる。ところが一方では、両礎石建物の梁間寸法に一致はみられず、南妻の位置にもずれがあるようである。この点からすれば、SB13520をSB5300の対称位置にある南北棟とはみなしがたい。しかし、この両礎石建物が、同一の敷地のなかで東西の両脇殿的な機能を分かちあっていた可能性も十分ありうるだろう。SB13520とSB5300の関係を解きあかすことなど、今後に残された課題は多いが、これまで不明であった「西方官衙」地区の様相を解明する手がかりが得られたことは大きな成果である。（浅川滋男）

4 東院地区の調査 第196次

1 調査の概要

本調査は平城宮内の用水路敷設工事に伴う事前調査として実施した。調査は、平成元年3月1日に開始し、平成元年3月28日に終了した。調査区は東西10m、南北50mとし、面積は500㎡である。調査区は平城宮東院地区の東辺中央に位置し、第154次調査の成果から、南側に大規模な東西溝（SD11600）をともなう東西道路が検出されるものと予想された。調査の結果、掘立柱建物7棟、掘立柱塀1条、井戸1基を検出したが、154次調査で検出されたSD11600は今回の発掘区までは延びないことが判明した。

2 検出遺構

調査区の北方と南方で建物、塀、井戸遺構を検出したが、発掘区中央部では、遺構が疎らであった。発掘区中央部は宮内の東西道路と推定されており、道路側溝は検出されなかったが、遺構が疎らな部分を道路位置と考えることもできる。

まず、発掘区の北部では、東西塀（SA13550）を検出した。SA13550は桁行が7.5尺等間であり、5間分を検出した。SA13550は154次調査で検出した塀積基壇建物をもつ官衙の南辺を区画する施設（掘立柱塀SA11560）の延長線上にほぼ位置し、SA13550の北方には官衙施設が推定される。SA13550の北では、SB13540・SB13535の2棟の掘立柱建物と南北塀SA13545を検出した。SB13540は桁行2間以上、梁間2間の東西棟で、桁行柱間寸法は10尺、梁間柱間寸法は9尺等間である。SB13535は柱穴を4個検出しただけであるが、桁行3間、梁間2間、柱間寸法9.5尺等間の南北棟と復原すると、井戸SE13530がSB13535の中央におさまり、SB13535は井戸屋形と考えられる。SE13530は西半分を検出したのみで、井戸枿を検出した時点で調査を打ち切り、井戸枿内の調査は将来の調査にゆだねることとした。SE13530の堀形は方約4.0mの隅丸方形で、中央に方1.5mの横板の井戸枿を構える。井戸廃絶後の埋土や井戸枿内から人頭大の河原石が数個出土し、井戸直上に据えられたと思われる石もあり、井

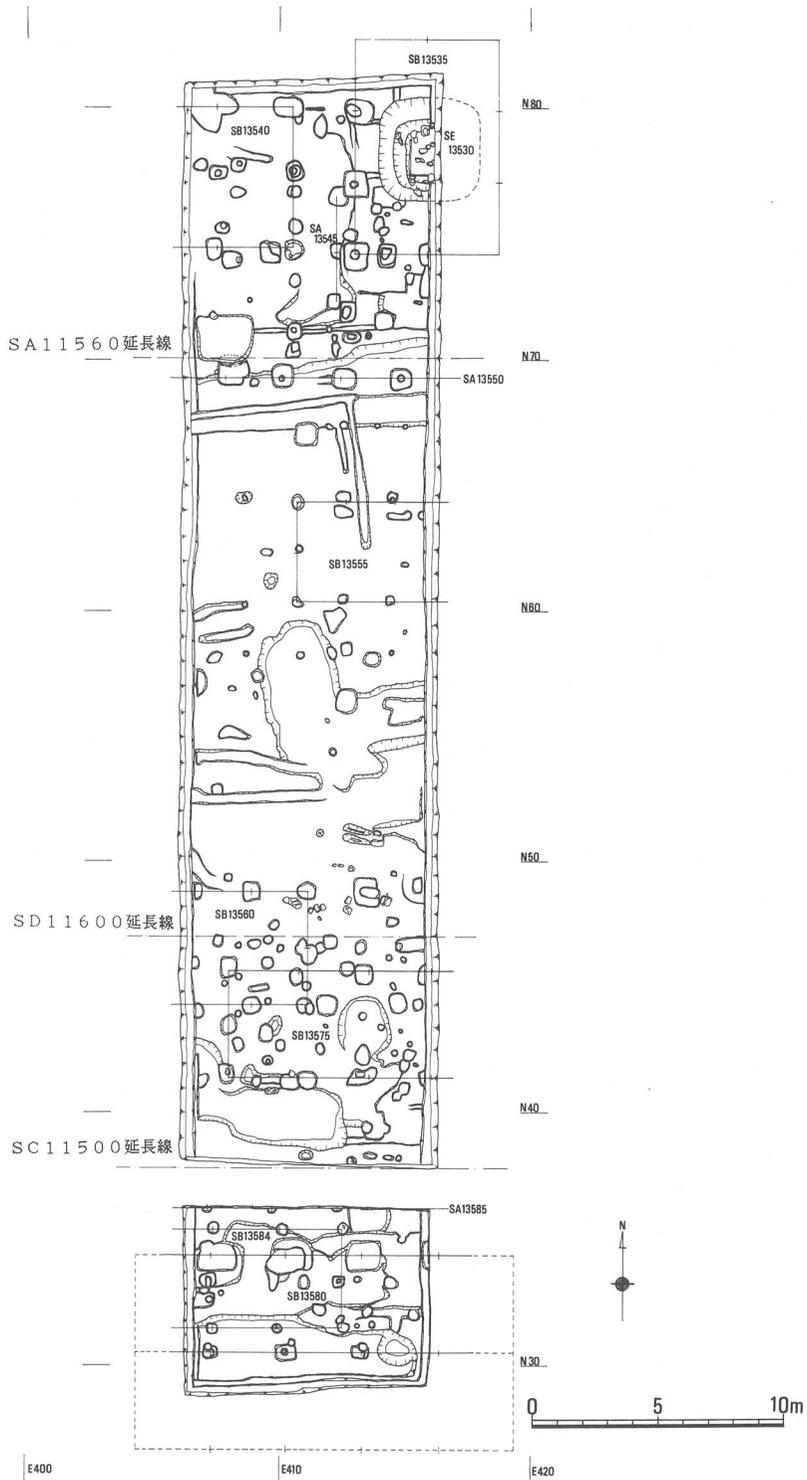


図14 第196次調査遺構配置図 (1 : 300)

戸枠の外周が石敷であった可能性が高い。

発掘区中央部では、小さな柱掘形の東西棟（SB13555）を検出した。SB13555は桁行3間以上、梁間2間、柱間寸法は桁行、梁間とも6.5尺等間である。SB13555は宮内道路推定地に位置しているが、宮内道路との前後関係は不明である。

発掘区南部では、SB13560、SB13575、SB13584、SB13580の4棟の掘立柱建物と掘立柱東西塀SA13585を検出した。SB13560は桁行3間以上、梁間2間で、柱間寸法は桁行、梁間とも7.5尺等間である。SB13575は桁行4間以上、梁間2間で、桁行柱間寸法が9尺等間、梁間柱間寸法が7尺等間である。発掘区の南端のSB13584は小さな柱掘形で、桁行3間以上、梁間2間で、桁行柱間寸法が8.5尺等間、梁間柱間寸法が6.5尺等間である。SB13584に重複して大規模な柱掘形と小規模な柱掘形列が、南北13尺隔てて平行に検出された。北側の柱列の柱掘形は東西1.5m、南北1.0mの隅丸方形で、深さは1.8mに達する大規模なものである。ただし、断ち割り調査では柱抜き取り穴、柱痕跡とも検出されず、実際に柱が立てられたか否かは疑問が残る。北側の柱列は掘立柱塀とも考えられるが、南の柱列の柱筋が北の柱列の柱筋と一致しており、北の柱列が桁行柱間寸法10尺、梁間柱間寸法26尺の東西棟の北側柱で、南の柱列がその床束である可能性もある。なにぶん調査面積が限られているため、いずれとも決めがたいが、北側の柱列が塀にしては立派なことから、今回は建物SB13580としておく。

これら4棟の建物が官衙内の建物とすると、発掘区中央部の宮内道路との境に区画施設が必要となろう。図14に第154次調査で検出した東西溝の中心線の延長線と、おなじく第154次調査で検出した官衙の北を区画する築地塀SC11500の延長線を示した。たとえば、SA13585を築地塀の南添え柱とすると、この築地塀はSC11500の延長上に位置することになる。しかし、その場合にはSB13560・SB13575は区画外になってしまう。従って、たとえSA13585が築地塀であっても、ある時期にはSB13560の北に閉塞施設を想定する必要があるだろう。なお、その時期には道路幅が第154次調査位置の道路幅より狭かったと考えられる。

今回の調査は調査範囲が限られ、柱穴の切り合いや、柱穴から時期を決定する出土遺物もなく、遺構の変遷を明らかにすることはできなかった。

3 遺物

出土土器の時期は、平城宮土器編年Ⅳ～Ⅴが中心であった。軒瓦は軒丸瓦48点、軒平瓦31点が出土した。そのうち6282型式-6721型式の組合せが約半数を占め、次に6308型式-6663型式の組合せが多く出土した。 (島田敏男)

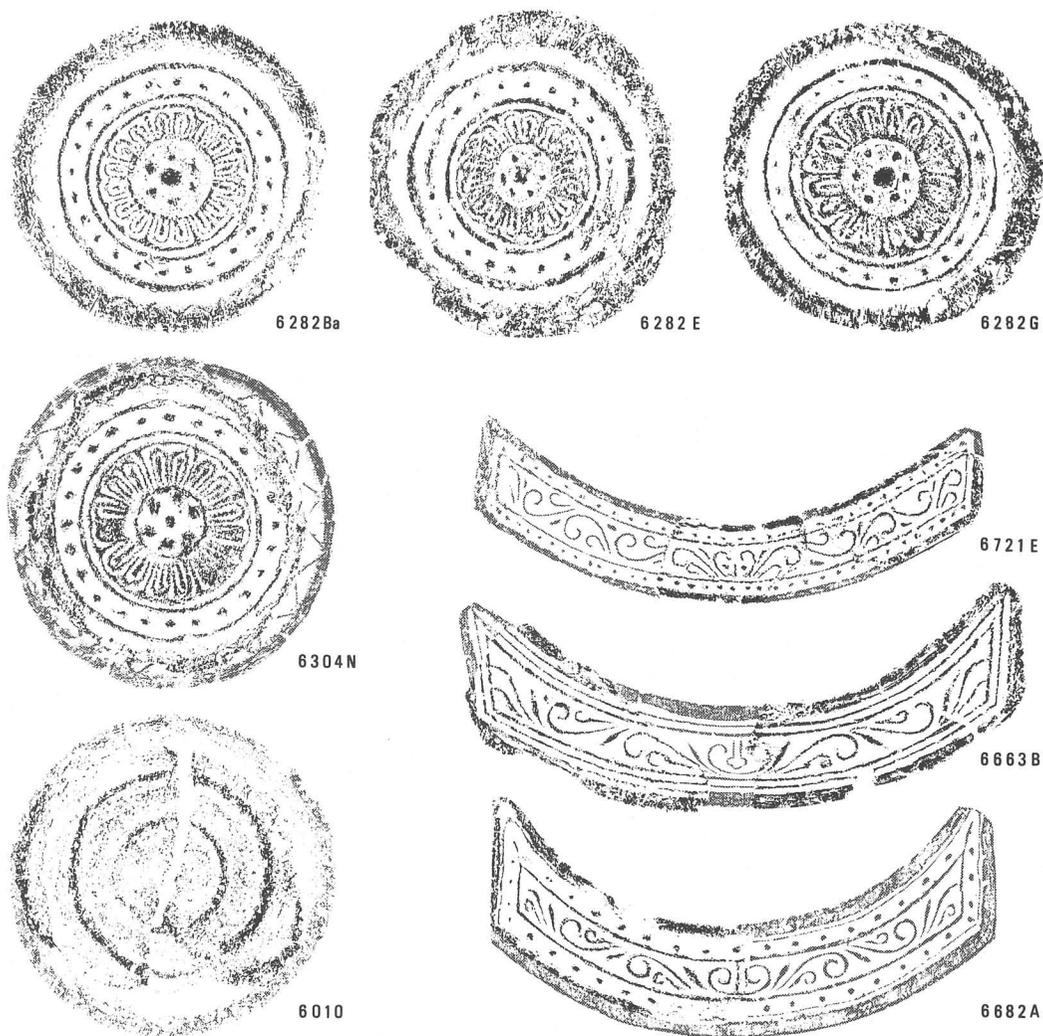


図15 第196次調査出土軒瓦 (1:4)

5 宮北面中門推定地の調査 第191 - 4次

住宅改築の事前調査である。北面大垣（心N443.882、第164 - 1次調査）と、朱雀門（心W265.447、第16次調査）・推定第一次朝堂院地区中軸線の北延長線との交点で、門の存在が想定される場所にあたる。調査地はT字形で、東西26m、南北11mのトレンチのほぼ中央部で幅5mのトレンチを北へ20m拡張した。

検出遺構は、奈良時代については掘立柱塀1条、溝1条で、近世の土坑、甕穴や、それ以降の新土坑なども多く存在した。

掘立柱塀SA01は、調査区南端で検出した東西塀で、6間分検出した。柱間は10尺等間である。どの柱穴も柱抜き穴があるが、東から2個目の柱穴は、断面調査によると、柱を一たん抜いたのち掘形の半分まで埋め立て、その底に小礫を敷き、再度柱を立てた様相を示している。

東西溝SD02心はSA01の北7.0mに位置する。溝幅は調査区の西端で2.2mあり、深さは0.8mを測る。SD02からは土器や瓦がかなり出土している。土器は、平城宮Ⅲのものが多い。軒瓦は、藤原宮式と平城宮軒瓦編年第Ⅰ期のものが、半数を占めているのが特徴である。軒平瓦は、藤原宮式と第Ⅰ期のもので出土点数の4分の3を占め、第Ⅱ期はなく、残りが第Ⅲ期である。軒丸瓦は、第Ⅰ～Ⅲ期のものが、ほぼ平均的に出土している。調査地周辺での軒瓦の組合せは、平城宮造営当初には藤原宮式と軒丸瓦6284型式 - 軒平瓦6664型式が使用されたと考えられるが、それ以降の組合せは不明である。なお、SD02埋土上には礎石根石風の拳大の礫群が1カ所にあったが、それに対応するものが存在せず、その性格は不明である。

東西溝以北は、地山が緩やかに高まっていく。さらに、幅1.5mで8.5m北へ拡張区を設けたが、N477で地山が一段高まるだけで、顕著な遺構は存在しない。

SA01は、23次、164 - 1次調査などで確認されている塀SA2330の東延長線に一致し、平城宮造営当初の北面の区画施設である。この塀は、23次調査の所見では後に築地塀に改作されるが、当調査区で、その痕跡は確認できなかった。し

かし、北側の東西溝が奈良時代を通じて存在すると推定でき、SA01の柱抜取穴があることから、同様に築地に改作したとみるのが妥当であろう。門については、推定位置に、奈良時代の初めにはSA01が存在している。従って、宮造営当初には、この位置に門はなかったことになる。また築地改作後については、削平が著しいため、礎石、基壇痕跡ともに確認できなかった。西面中央の宮城門（佐伯門）と同じ規模であったとすると、基壇の北端はSA01の北でSD02にかかることになる。今回の調査では、北面中門推定地に門が存在していたという根拠は見出せなかった。平城宮北面の宮城門の位置については、あらためて追求を進めて行く必要がある。

（綾村 宏）

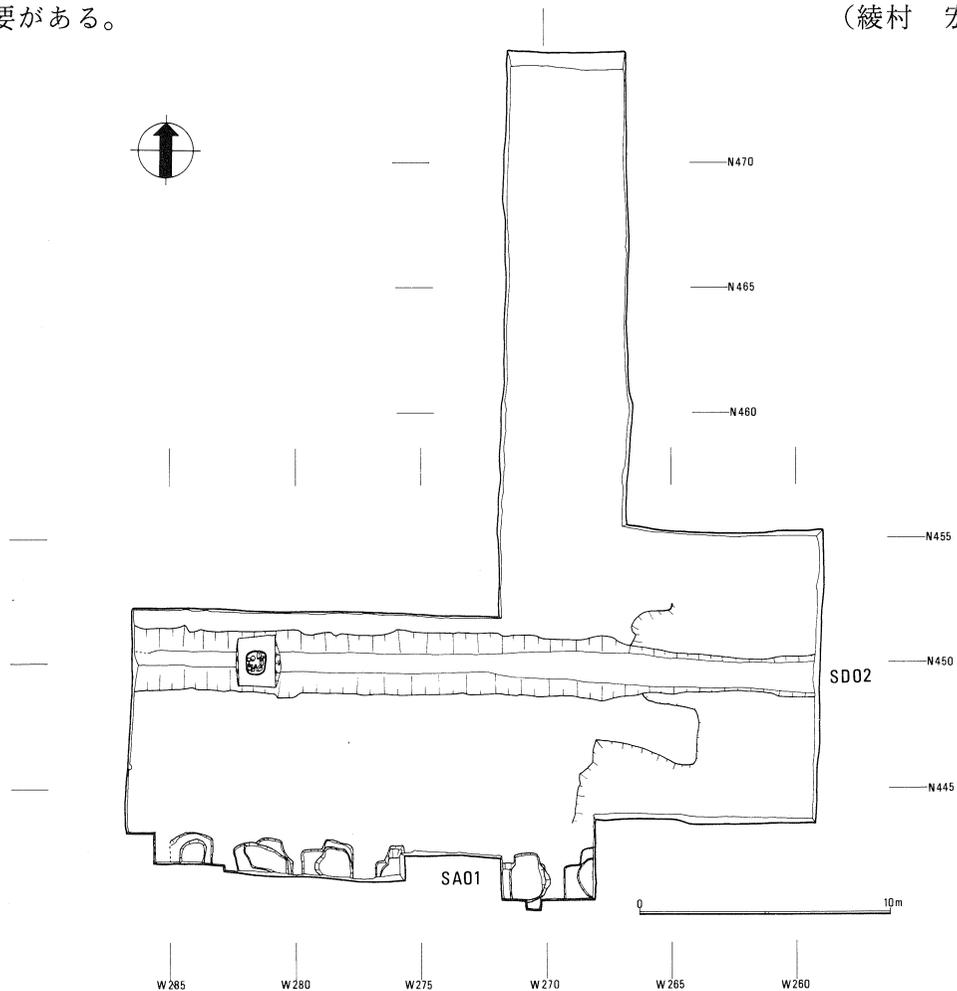


図16 第191-4次調査遺構配置図（1：300）

1 調査の概要

1988年度に、平城宮東面大垣と東二坊坊間路に関わる2件の現状変更に伴う事前調査を実施した。法華寺町内の下水道・水路改修に伴う事前調査（191 - 12次）と、西田氏家屋新築工事に伴う事前調査（191 - 5次）である。

191 - 12次では、工事予定位置に3本のトレンチを設定し（以下「下水道調査区」とする）、北から北区・中区・南区とし、南区、北区、中区の順で調査をおこなった。北区は平成元年2月4日に調査を開始し、2月8日に調査を終了した。調査区はL字形とし、南北トレンチが南北5.0m、東西0.7m、東西トレンチが東西43.3m、南北0.7m、調査面積は38.0㎡である。中区は平成元年2

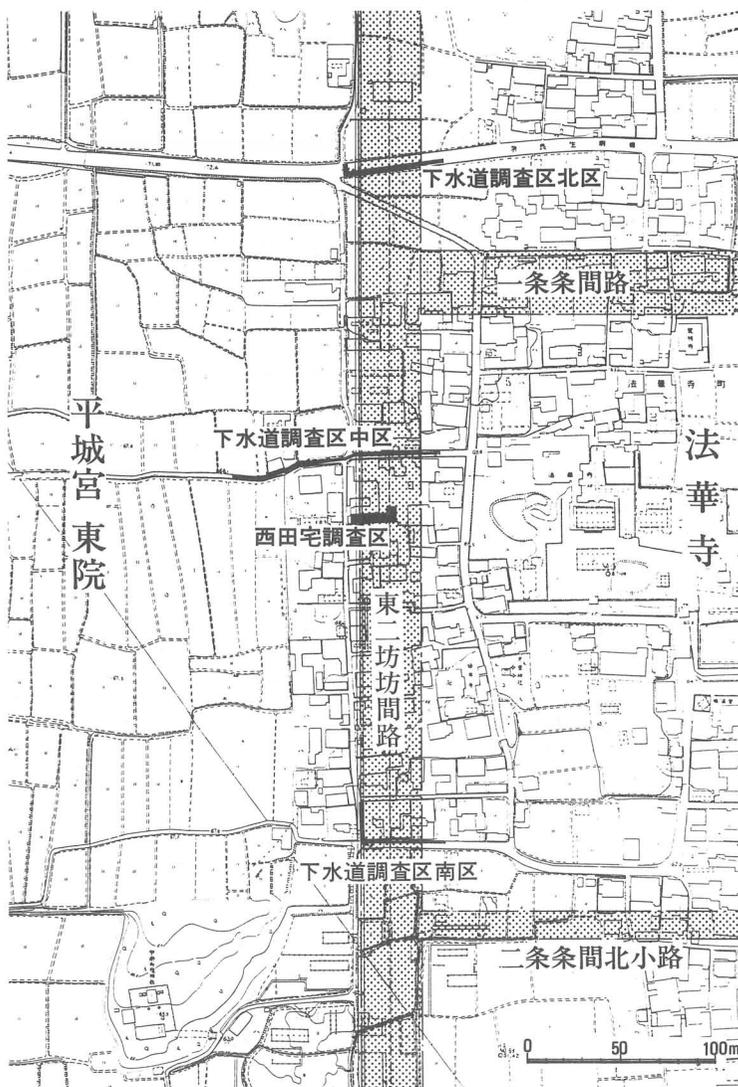


図17 東面大垣の調査位置図（1 : 4000）

月10日に調査を開始し、3月4日に調査を終了した。調査区は東西122.8m、南北1.1～2.2m、調査面積は182.6㎡である。南区は、平成元年1月30日に調査を開始し、2月3日に調査を終了した。調査区はL字形トレンチとし、南北トレンチが南北17.5m、東西0.7m、東西トレンチが南北0.7m、東西41.0m、調査面積は40.1㎡である。

後者は、家屋建設予定地に調査区を設定し（以下西田宅調査区とする）、昭和63年6月7日に調査を開始し、6月23日に調査を終了した。調査区はL字形に設定し、幅3.0m、長さ30.0m、調査面積は90㎡である。

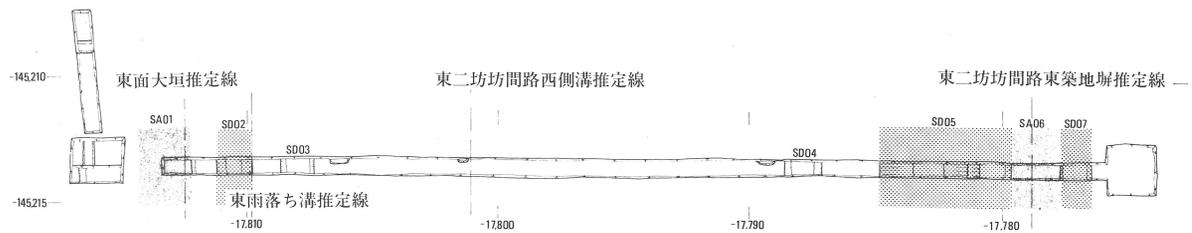
調査地は平城宮東院の東辺から東二坊坊間路にあたり、宮内施設および東面大垣・東二坊坊間路に関わる遺構が検出されるものと予測された。調査の結果、東面大垣とその東側の雨落ち溝、東二坊坊間路東側溝、掘立柱建物・塀、宮内石敷遺構を検出した。

2 検出遺構

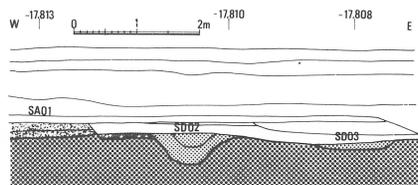
下水道工事調査区北区 東西トレンチの西端では、2条の南北溝（SD02・SD03）と溝の西に築地塀の積み土を検出した。SD02は溝幅1.4m、深さ50cmで、SD03は幅1.2m、深さ10mである。SD02の西では地山を約10cm削り出し、さらにその上に土を積み、現状で約20cmの高まりとなっている（SA01）。この高まりは宮東面大垣と推定され、SD02は東面大垣の東雨落ち溝と推定される。

また、東西トレンチの東でも3条の南北溝を検出した（SD04・SD05・SD07）。このうち中央のSD05は幅5.0m深さ1.0mの大規模な溝である。SD05は東二坊坊間路の東側溝と推定され、東側が幅1mのテラス状になり、溝の最深部は西側に片寄っている。そして、SD05とその東のSD07に挟まれた部分は、法華寺北方の坪の東を限る築地塀（SA06）であり、SD07はSA06の東雨落ち溝と考えられる。

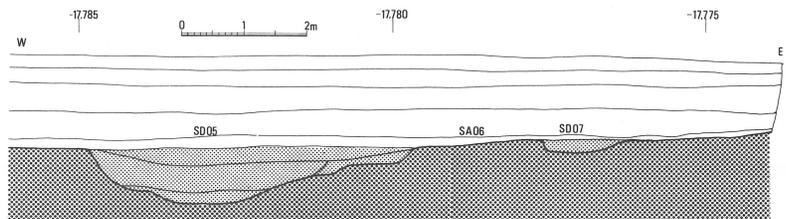
下水道工事調査区中区 調査区の中央東寄りでは、宮東面大垣の基底部分（SA14）と同東雨落ち溝（SD15）を検出した。残存している基底幅は1.7mで、SD15は幅2.0m、深さ30cmである。SD15の東は東二坊坊間路にあたるが、東西両側溝は



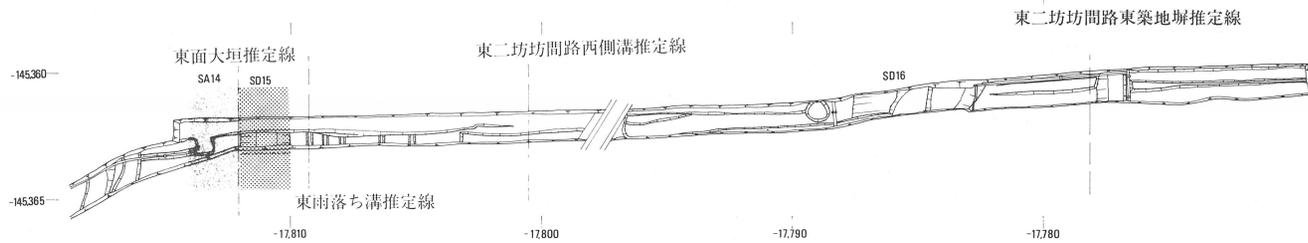
下水道調査区北区 (1 : 300)



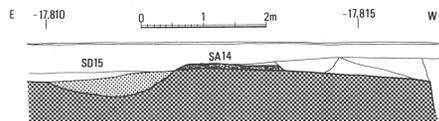
SA01・SD02・SD03断面図 (1 : 120)



SD05・SD07断面図 (1 : 120)



下水道調査区中区 (東半 1 : 300)



SA14・SD15断面図 (1 : 120)

図18 遺構配置図・断面図

検出されなかった。なお、調査区の東で南北溝SD16を検出したが、埋土に近世の遺物を含んでおり、坊間路東側溝とは考えがたい。

SA14のすぐ西では、3条の掘立柱列を検出した（SB11・SB12・SB13）。SB11では柱間2間分を、SB12では1間分を、SB13では2間分を検出した。柱間寸法はそれぞれ、10尺等間、10尺、8尺等間である。いずれも、建物であるか塀であるかは不明である。

調査区の西寄りでは石敷遺構SX09と古墳時代の南北溝SD10を検出した。SX09は地山を5cm～10cm掘り下げ、人頭大の川原石と2個の凝灰岩が据えられている。現存する石敷の範囲は東西3.5m、南北1.4mで、石敷は発掘区の北へ延びる。西側は破壊されているが、南側と北側では掘り形を検出し、石敷の東南隅を確定しえた。従って、石敷は東西5.5m以上、南北1.4m以上の範囲に広がっていたと考えられる。なお、石敷の性格は不明である。調査区西辺では東西棟の掘立柱建物SB08を検出した。SB08は桁行5間、9尺等間の東西棟と考えられる。

下水道工事調査区南区 南北トレンチでは、トレンチ西壁際で、南北方向の地山の高まりを検出した（SD17）。この高まりは、東面大垣東雨落ち溝の西肩と推定されるが、東肩は検出されなかった。トレンチ西南隅では、SD17から西へ抜ける東西溝（SD18）を検出した。SD18は大垣を貫通する暗渠と推定される。

東西トレンチでは、近世の瓦溜り、4条の南北溝を検出したが、溝からは伴出遺物がなく、時期の決定はできなかった。東二坊坊間路の東西側溝の推定位置にあたる溝もあるが、きわめて浅い溝で、溝内に水が流れた際の堆積層がなく、溝であるか疑問な点もあり、東二坊坊間路側溝とは考えがたい。

西田宅調査区 本調査区では顕著な遺構は検出されず、奈良時代の遺構としては柱穴を1個検出したのみである（SX17）。SX17は方80cmの隅丸方形で、深さは60cmである。穴の底には拳大の石を混えた粘土を敷いて地業としている。

3 東二坊坊間路について

以上の4つの調査区で検出された東二坊坊間路に関わる遺構は、宮東面大垣・同雨落ち溝・坊間路東側溝・同側溝の東にたつ築地塀である。過去の調査成果を

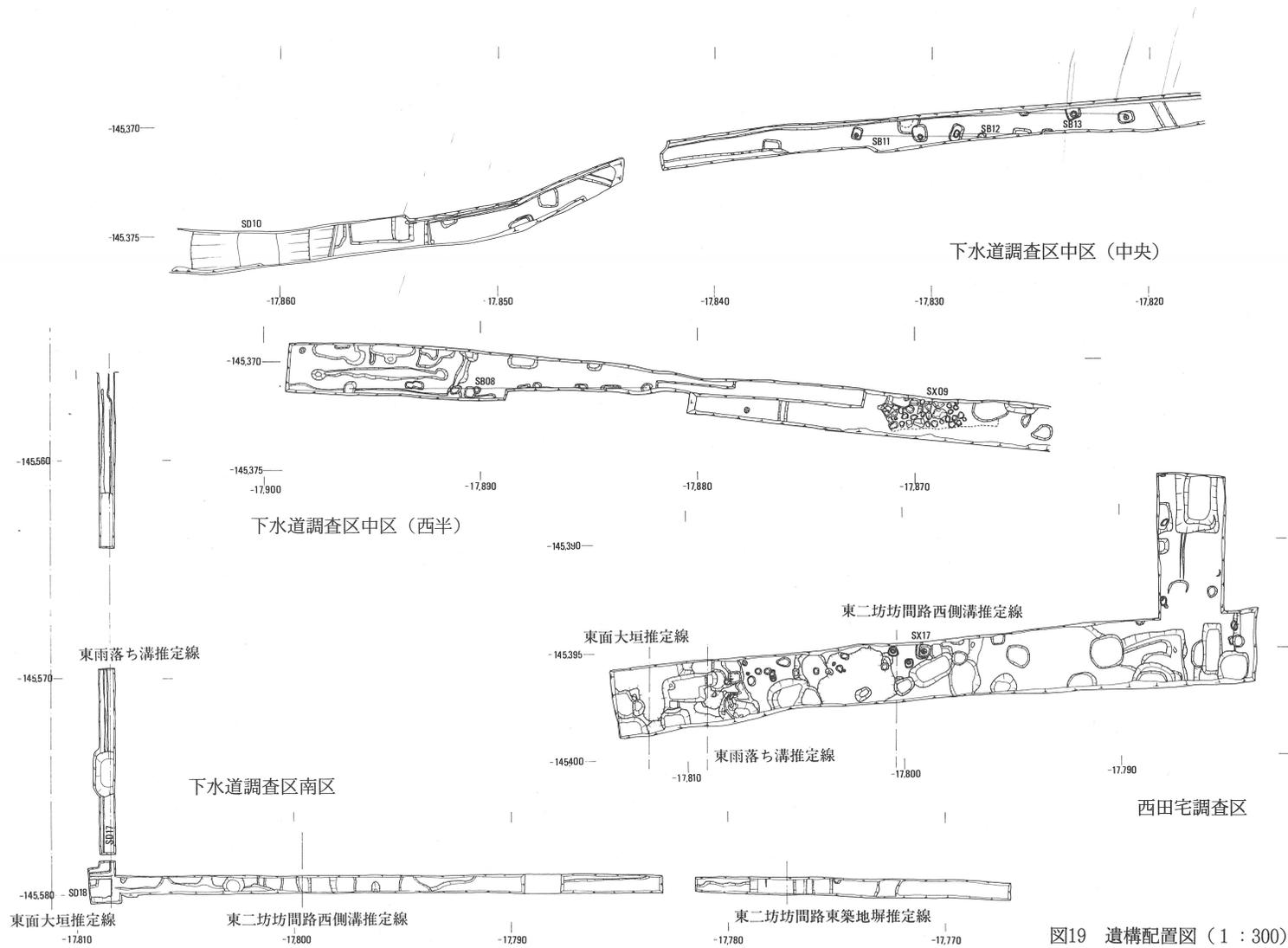


図19 遺構配置図 (1 : 300)

含めて、東二坊坊間路について検討してみよう。

東面大垣・同東側溝 今回の調査では下水道調査区の2区で東面大垣を、同調査区北区・南区で東雨落ち溝を検出している。過去の調査では、第44次調査と第99次調査で東面大垣と同東側溝を検出し、第88-16次調査で東面大垣の遺構を検出している。各調査における検出遺構の国土方眼座標を表3に示し、第44次調査と第99次調査の成果を結んだ延長線を各図に示した。軸線は約 $0^{\circ}13'$ 北で西に振れる。今回検出した東面大垣・雨落ち溝は第44次・99次調査の延長線から少しずれる。南面大垣の場合でも、大垣の軸線が必ずしも一直線になるとは限らず、場所によって軸線がずれる現象がみられ、東面大垣の場合でも、軸線がところにより多少のずれが生じているものと考えられる。

東二坊坊間路東西側溝 今回の調査では、東側溝は下水道調査区北区で検出しただけである。西側溝はいずれの調査区でも明確な遺構は検出されなかった。過去の調査では第44次調査・第99次調査で西側溝が検出されている。つまり、第99次調査区以北では、西側溝が検出されていないことになる。また平城宮と法華寺が接する部分では、東側溝が検出されていないことになる。これは、西田宅調査区で柱穴が検出され、坊間路の推定地に建物が建っていたと推定されることから、

表3 東面大垣・東二坊坊間路関係遺構の座標値

調査地	築地心	東雨落ち溝心	西側溝心	東側溝心
191-12次北区		X=-145213.590 Y=-17810.561		X=-145217.590 Y=-17782.861
88-16次	X=-145298.395 Y=-17812.247			
191-12次中区		X=-145318.224 Y=-17810.975		
99次	X=-145620.494 Y=-17811.218	X=-145620.486 Y=-17808.018	X=-145620.469 Y=-17800.518	
44次	X=-145729.511 Y=-17810.327	X=-145732.305 Y=-17807.602	X=-145743.685 Y=-17798.894	

平城宮と法華寺の寺域間には坊間路が通っていなかった可能性がある。法華寺以北については東側溝（SD05）・築地（SA06）が検出されているので、坊間路は存在していたことがわかる。なお、SA06は第80次調査で検出された阿弥陀浄土院の西を限る築地塀（暗渠を検出）の延長線上にはほぼ位置する。東面大垣（SA01）の基底幅を7尺（2.1m）とすると、東面大垣との心々距離は34.6mである。

4 遺物

土器の出土量は少ないが、下水道調査区北区のSD05からは、奈良時代後半を中心とする土器が出土している。軒瓦はおもに西田宅調査区から、奈良時代から近世までの瓦が出土した。（島田敏男）

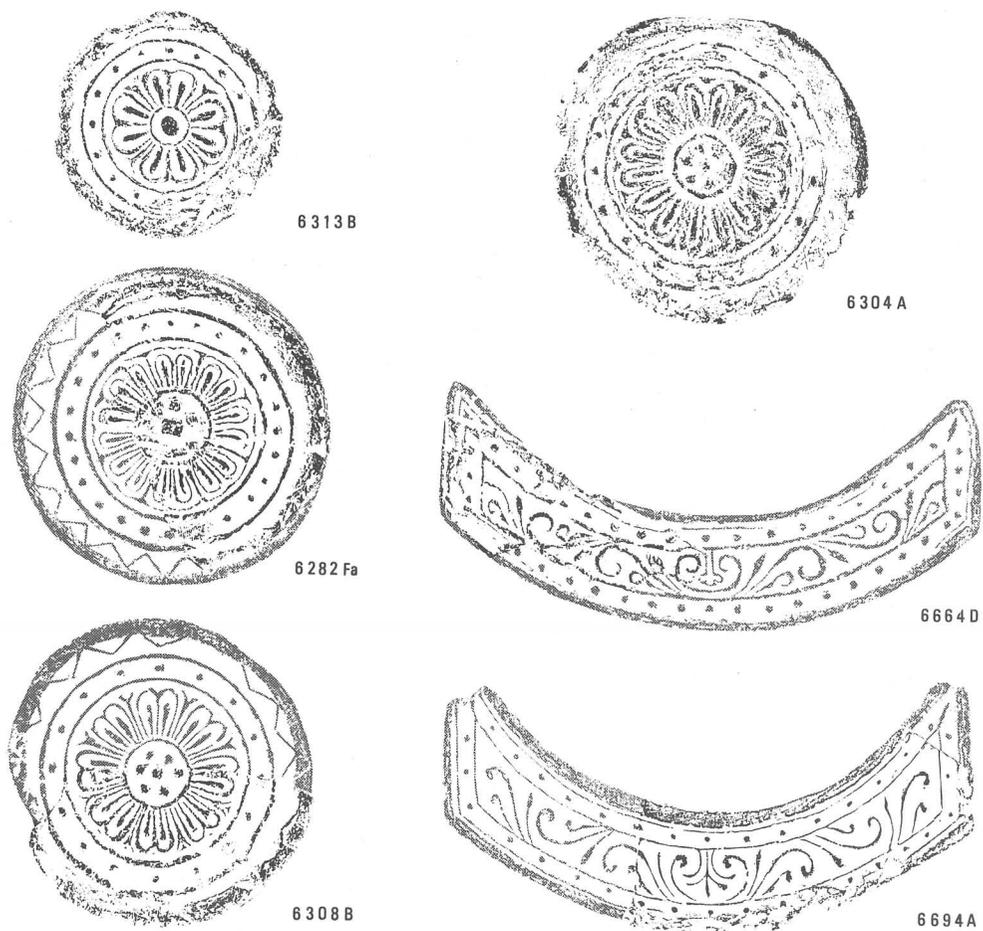


図20 第191-5・12次調査出土軒瓦（1：4）

7 平城宮北方遺跡の調査 第191-2次

この調査は、住宅改築に伴う事前調査である。調査地は平城宮の北方、奈良山丘陵の裾に近く、周囲には佐紀盾列古墳群が広がる。調査地は現状では、北から南に向けて緩やかに傾斜しており、また後世の整地が著しいが、表土下約80cmで黄褐粘質土の地山となる。

遺構

奈良時代の遺構としては、調査区北西隅で検出した柱穴だけである。柱穴には2時期あり、ほぼ同位置で作りかえられている。古い方は一辺約1m、新しい方は一辺約0.8m。調査区内では他に柱穴を検出していないので、建物の隅の柱か、東西方向の塀と考えられる。

奈良時代以前の遺構としては、調査区東南隅で検出した円筒埴輪を転用した棺がある。北北西～南南東に主軸をとる墓坑は、東側が新しい土坑で破壊されているが、隅丸の長方形に近く、長軸約1.5m、短軸約0.7m。断面半円形を呈し、深さは約20cmほど残っていた。

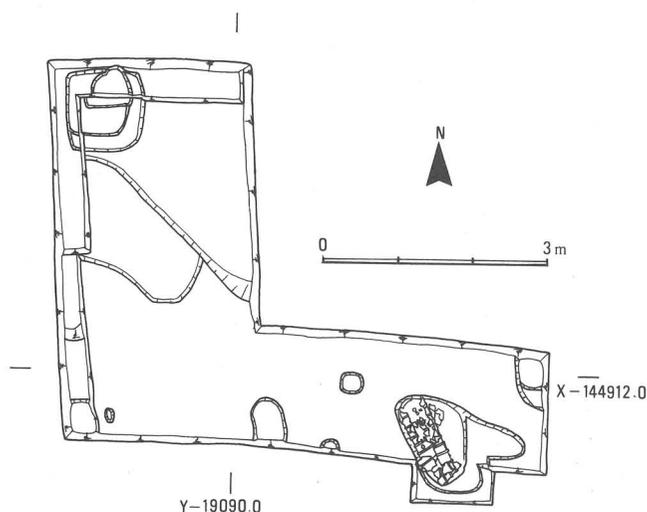


図22 第191-2次調査遺構配置図(1:100)



図21 調査位置図(1:10000)

は約20cmほど残っていた。円筒埴輪2個をつないで棺本体とし、両端はそれぞれ別の円筒埴輪で蓋とし、つなぎ目にも別の円筒埴輪片をあてている。棺外形寸法は、全長約1m、幅約35cmで、大きさから小児用と考えられる。5個の円筒埴輪は、外面が縦あるいはやや斜めのハケで調整されてお

り、2次調整は省略されている。内面には、指ナデが認められるが、口縁付近のみハケで調整する。3が斜め方向のほかは、いずれも横方向のハケ目である。これらの円筒埴輪は、付近の古墳のものを転用したと思われるが、大きさ、製作技法などから棺本体に用いた2個（1・2）、北端の蓋に用いた1個（3）、南端の蓋とつなぎ目に用いた2個（4・5）の3種類に分けられる。なお、棺本体に用いた2個の内、南方のもの（2）にはベンガラがのこっていた。また、南端の蓋に用いた1個（4）は須恵質である。

現在のところ、調査地周辺の古墳で出土する円筒埴輪には、いずれも2次調整の横ハケが認められ、2次調整を省略したこの種の円筒埴輪をもつ古墳は知られていない。調査地付近に、平城宮内の神明野古墳のように古くに破壊されてしまった古墳があったのであろう。

（小林謙一）

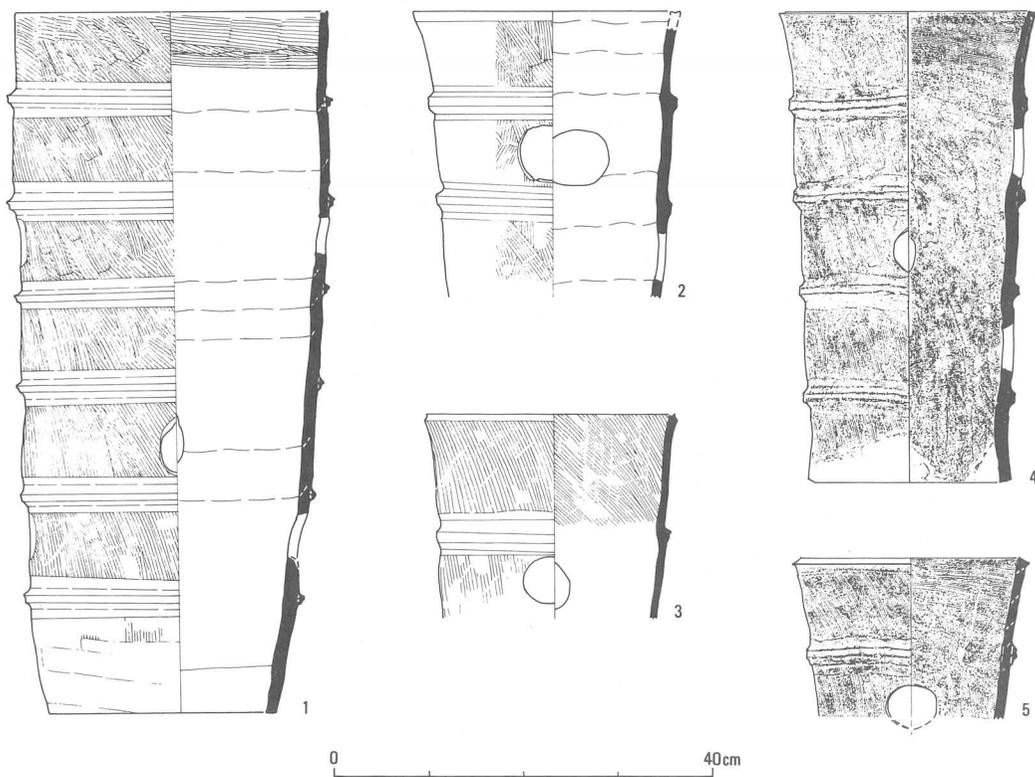


図23 第191-2次調査出土円筒埴輪（1：8）